言語交流研究所　ヒッポファミリークラブ
〒150-0002 東京都渋谷区渋谷2-2-10 青山H&Aビル3F TEL. 03-5467-7041(代)
中部・関西・西日本・九州・アメリカ・メキシコ・韓国・台湾にも支部があります。

フリーダイヤル：0120-557-761
ホームページ：http://www.lexhippo.gr.jp/

LEX Institute for Language Experience, Experiment & Exchange
Annual Report 2009

言語交流研究所 2009年度 年次活動報告書

2008年10月～2009年9月

Spanish	¡Hola!
Korean	안녕 하세요!
English	Hello!
Japanese	こんにちは!
German	Guten Tag!
Chinese	你好!
French	Bonjour!
Italian	Ciao!
Russian	Здравствуйте!
Thai	สวัสดี
Malay	Selamat tengahari!
Portuguese	Boa tarde!
Indonesian	Selamat siang!
Cantonese	你好!
Arabic	السلام عليكم
Hindi	नमस्ते
Taiwanese	汝好!
Turkish	Merhaba!
Swedish	Hej!
Swahili	Jambo!
Vietnamese	Xin Chào!

Language Station hippo
By LEX Institute / Hippo Family Club

ことばと人間の探求

言語交流研究所　代表理事
榊原　陽

ヒッポでやっているのは「外国語」ではない。同じ人間のことばの活動である。

この仕事を始めて以来、私がやってきたことはただひとつ「人間とは何か」ということを探求し続けることだった。ヒッポでは活動をしている様々な人たちがいろいろな話をしてくれる。自分ひとりでは見つけられないことも、人間にはことばがあるから人の体験を通して、ことばを話す人間とは何か、ということを私も見つけることができるのである。言い換えれば、人間に一度生まれたなら、人間に生まれて良かったな、人間ってすごいな、と実感する話に耳を傾けながら、私はこの活動を続けてきただけだ。

人間は音声を文字に置き換えた瞬間から、ことばを○○語、××語というふうに外側から見るようになり、その違いばかりに注目するようになってしまった。これが「外国語」という思想の誕生ではなかったか。ことばは全て、同じ人間のことばである。ヒッポには「外国語」というものは存在しない。

自分のこどもが生まれた時「この子が大きくなった時、世界はどんどん狭くなっていくだろう。そんな世界を伸び伸び生きていってほしい。それには日本語以外のことばも出来たらいいじゃないか」。そう思ってこの仕事を始めたのは 40 年程前のことだ。当時英語で始めたこの活動も、今では 21 のことばの世界に広がった。ことばの数が問題なわけではない。同じ人間が見つけることばの自然な道筋が、多言語を通してくっきりと見えてくるのである。あらゆる言語はその構成音群が見事に共鳴し、簡明な秩序でそれぞれの交響曲を奏でている。自然がどう振舞っているのか、人間のことばとは何か。皆とともに探求していく場がヒッポである。

Multilingual Life
2008-2009

Hosting / Daily Activities / Family Exchange / Youth Exchange

2008

Oct. 研究協力者の南部陽一郎氏ノーベル賞受賞記念講義「素粒子物理の最前線」開催
（講師：小寺克茂氏）10/30
韓国合宿＆1泊ホームステイ交流 10/31 ～ 11/3

Nov. メキシコにて『Aventuras con FOURIER』発刊（「フーリエの冒険」スペイン語版）

Dec. 冬の家族交流 12/21 ～ 1/4
（メキシコ・コスタリカ・台湾・ロシア・マレーシア）

2009

Mar. オープントラカレクラブ講座開催 3/22 ～ 4/2
春の青少年交流 3/26 ～ 4/5
（タイ・フランス・マレーシア・オーストラリア）
春の家族交流 3/26 ～ 3/31（韓国）

Apr. ゴールデンウィークの家族交流 4/26 ～ 5/10
（フランス・マレーシア・イタリア・スペイン）

May. 特別講演「多言語について」開催
（講師：スザンヌ・フリン氏 /MIT 言語学教授）5/31

Jul. 夏の青少年交流 7/21 ～ 8/24
（アメリカ・ロシア・メキシコ・韓国・台湾・イタリア）

Aug. 夏の家族交流 8/1 ～ 8/25
（メキシコ・ロシア・韓国）
第 2 回アジア青年多言語合宿交流 8/25 ～ 8/31（上海）
"世界に広がる、多言語仲間！"スワヒリ語版CD発刊

Sep. 秋の家族交流 9/19 ～ 9/23（上海）

2009 Calendar

言語交流研究所　事業体と事業内容

事業目的

「ことばと人間」を研究テーマに、多言語の自然習得及び多国間交流の実践を通して、言語と人間の科学的探究を進め、国際間の理解と人類の共生に寄与することを目的とする。

組織と活動の概要

言語交流研究所

ヒッポファミリークラブ
- 日常的な多言語の自然習得<多言語活動>
- 地域を越えた各種ワークショップや体験交流会
- 各地での講演会やセミナー、フォーラムの実施
- ホームステイを中心とした国際交流活動

トランスナショナルカレッジ オブ レックス
- 講座と研究　・フィールドワークと実習
- 研究誌発行　・研究開発（ヒッポレターシステム、コンピュータソフト）

事業内容

1. 複数のことばを同時に自然習得する多言語活動の実践部門**「ヒッポファミリークラブ」**（会員制）の運営
2. ヒッポファミリークラブの多言語・自然習得活動の体験を基盤に「ことばと人間」を自然科学的に探求する**「トランスナショナル カレッジ オブ レックス」**の運営
3. 日本に滞在している研修生や留学生を会員家庭に迎え入れるプログラム**「トランスナショナルホームステイ受け入れ活動」**の実施
4. 海外の諸機関諸団体と協力して各国にホストファミリーを開拓し、あらゆる年代の人々がホームステイに出かける**「トランスナショナル ホームステイ プログラム」**の実施
5. 高等学校交換留学制度**「イヤーロングプログラム」**による、留学生派遣と受け入れ、及びそれに伴う協力機関の開拓
6. 実践と研究に基づく、言語に関する講演会、セミナー、フォーラム等の企画と実施
7. 多言語活動に関する各種マテリアル、ソフトウェアの開発、制作（CD、CD-ROM、DVD、ビデオテープ、ホームページなど）
8. 文字を人間の自然な認識という面から科学的・多言語的に捉え、世界中で共有できる文字システム「ヒッポレターシステム」の開発
9. 言語研究活動に関する出版
10. 広報、機関紙、研究誌の発行ほか

組織概要

名　　称：言語交流研究所
LEX: Institute for Language Experience, Experiment & Exchange
本部所在地：〒150-0002 東京都渋谷区渋谷 2-2-10 青山 H&A ビル 3 階
代表理事：榊原 陽
設　　立：1981 年 10 月 1 日
性　　格：理事会を決議機関とする任意団体
運　　営：自己資金 100%

主な活動内容

実践部門　ヒッポファミリークラブ

7 ヵ国語（スペイン語、韓国語、英語、日本語、ドイツ語、中国語、フランス語）* をベースに、複数の言語を同時に、自然の道筋で習得していく活動を実践しています。

*現在は 21 のことば：7 ヵ国語に加えて、イタリア語、ロシア語、タイ語、マレーシア語、ポルトガル語、インドネシア語、広東語、アラビア語、ヒンディー語、台湾語、トルコ語、スウェーデン語、スワヒリ語、ベトナム語

日常の多言語活動（ファミリー活動）

言語交流研究所の研究員（フェロウ）によって運営されている活動場所（ファミリー）は全国に 700 ヵ所以上。こどもを連れた家族を中心に、幅広い年代のメンバーが集います。メンバーは、世界の歌やオリジナルのストーリーが収録されている多言語マテリアル CD を日常的に楽しみながら、地域の活動場所に参加します。

アメリカ、メキシコ、韓国、台湾にも支部があり、同じ活動を楽しむ仲間が世界にも広がっています。

国際交流活動（ヒッポ トランスナショナルホームステイ）

国や文化、ことば、習慣、人種の違いを超えて、どんな人にも同じ人間として心を開き、仲良くなることを目的としたホームステイ交流を年間を通じて実践しています。

現在約 30 の国や地域 ** に協力団体があり、青少年交流（10 日間～ 1 ヵ月間）、高校留学プログラム（約 1 年間）、家族交流（4 日間～ 2 週間）などのプログラムを通じ、年間約 1,500 名のメンバーが海外で相互交流を楽しんでいます。

また、協力団体や外務省、（独）国際協力機構（JICA）、（財）海外技術者研修協会（AOTS）などの機関を通じて来日する世界の人たちと交流する「受け入れホームステイプログラム」も盛んです。例年 120 ヵ国以上、約 5,000 名の方々をメンバーの家庭で受け入れしています。

** 交流している国や地域は、アメリカ、カナダ、コスタリカ、メキシコ、ブラジル、インド、インドネシア、シンガポール、タイ、韓国、中国、ブルネイ、マレーシア、台湾、オーストラリア、ニュージーランド、ミクロネシア、イタリア、イギリス、オーストリア、オランダ、スウェーデン、スペイン、ドイツ、フィンランド、フランス、ルクセンブルク、ロシア、トルコ、チュニジア、南アフリカの 31 の国や地域。

研究部門　トランスナショナル カレッジ オブ レックス（通称：トラカレ）

「ことばと人間」をテーマに、学問の分野を超えた研究に取り組んでいます。ことばを自然科学的な視点から捉えなおし、言語音声の解析や、記紀万葉などの書物を通して、ことばの成立について研究しています。研究活動から生まれた『フーリエの冒険』、『人麻呂の暗号』などの書籍も国内外で大きな反響を呼び、ともにベストセラーになっています。

構成

言語交流研究所は、理事会・研究員（フェロウ）と事務局で構成されます。

■代表理事：榊原 陽　(Transnational College of LEX 学長)

■理事：

赤瀬川 原平　(作家・画家)
内田　幹和　(元株)日立情報システムズ専務取締役)
大和田 康之　(在米国際基督教大学財団理事 / LEX America 理事)
尾関　雅則　(元鉄道総合技術研究所理事長)
長谷川 龍生　(詩人)
丸山　瑛一　(独立行政法人 理化学研究所 イノベーション推進センター特別顧問)
三井田 純一　(元原子力研究所東海研究所副所長)
南　繁行　(大阪市立大学大学院教授)
鈴木　堅史　(言語交流研究所 / LEX America 理事)
平岡　一武　(言語交流研究所)

■ Transnational College of LEX 学長：榊原 陽 (言語交流研究所 代表理事)

■ Transnational College of LEX シニアフェロウ

赤瀬川 原平　(作家・画家)
太田　次郎　(お茶の水女子大学名誉教授 / 分子生物学)
斎藤　尚生　(東北大学名誉教授 / 地球物理学)
酒井　邦嘉　(東京大学准教授 / 言語脳科学)
坂田　明　(ミュージシャン)
塚原　祐輔　((株) 理研ジェネシス 代表取締役社長)
永井　清陽　(ジャーナリスト / 常磐大学)
中村　桂子　(JT生命誌研究館館長 / 生命科学)
南部　陽一郎 (シカゴ大学名誉教授 / 理論物理学)
長谷川 龍生 (詩人)
林　輝　(東京工業大学名誉教授 / 精密機械工学)
坂東　昌子 (愛知大学名誉教授 / 素粒子物理学)
丸山　瑛一　(独立行政法人 理化学研究所 イノベーション推進センター特別顧問)
三井田 純一　(元原子力研究所 東海研究所副所長 / 熱・統計力学)
南　繁行　(大阪市立大学大学院教授 / 電磁気学)
山崎　和夫 (京都大学名誉教授 / 理論物理学)
Lee Jacknow　(元ニューヨーク州立大学 / 電気工学)
Suzanne Flynn　(マサチューセッツ工科大学教授 / 言語学)

主な出版物

『ことばを歌え！こどもたち』 (榊原 陽 著／筑摩書房 刊)

■暗号シリーズ (藤村由加 著／新潮社 刊)
『人麻呂の暗号』『額田王の暗号』
『古事記の暗号』『枕詞の暗号（「枕詞千年の謎」改題）』

■冒険シリーズ (ヒッポファミリークラブ 刊)
『フーリエの冒険』『量子力学の冒険』『DNA の冒険』

■冒険 CD ブックシリーズ (ヒッポファミリークラブ 刊)
『フーリエの冒険～第５章～ 微分<英語版>』
『量子力学の冒険～第５話～ E. シュレディンガー さらば、マトリックス<英語版>』

『ヒッポレターシステム インターネット時代の文字表記法』(ヒッポファミリークラブ 刊)

『オドロ木モモノ木ヒッポノ記』(ヒッポファミリークラブ 刊)

☆冒険シリーズは英語版 (Language Research Foundation)、韓国語版 (Science Culture)、中国語版(繁体字版) (天下文化書房 / 台湾)、スペイン語版 (UNAM / メキシコ) が現地でも出版されています。日本語版は各大学や高専で、英語版はアメリカのコーネル大学など、各地の大学の教科書や参考書として採用されています。

2009 年度の話題から

新しく就任した研究協力者を迎えての講演会の実施

Dr. Suzanne Flynn

約１時間にわたり、ことばについて講演していただきました

アメリカ、マサチューセッツ工科大学のスザンヌ・フリン教授（言語学）が、正式に言語交流研究所の研究部門の研究協力者に就任し、2009 年 5 月、特別講演会のために再来日しました。講演会は、大阪（梅田・阪急ターミナルビル）、名古屋（国際センタービル）、東京（目白・学習院大学 創立百周年記念会館正堂）にて実施。メンバーや一般の方を合わせ、全国で 2,000 名以上の方が参加されました。

教授は、いかに多言語が人間にとって自然であるかを、８つの基本的な項目にまとめ、詳しく語られました。

東京では、フリン教授を迎えてのワークショップを開催（目黒・こまばエミナース）。実際の多言語活動の様子やこの環境で育ってきた青少年の体験などを紹介しました。

ースザンヌ・フリン教授の講演要項ー【ことばについて８つの基本的なこと】

1. ことばを話すことは、人間特有の能力です。
2. 基本的には、人間のことばは一つしかありません。
3. こどもはことばを「教わるのではありません」。
4. 多言語は人間の知能（知性）の自然な状態です。
5. 一人が習得できることばの数に限りはありません。
6. 誰でも生涯を通じて新しいことばを学ぶことができます。
   それどころか、それによって心を若く保つことができます。
7. 多くのことばを知れば知るほど、習得するのが簡単になります。
8. 複数のことばができる事は、さまざまなレベルにおいて、
   重要でポジティブな結果をもたらし、それは生涯にわたって続きます。

『量子力学の冒険』英語版に南部陽一郎氏が序文を寄稿

南部陽一郎氏

『量子力学の冒険』英語版

英語版『量子力学の冒険』の監修をされた、ヒッポの研究部門の協力者、南部陽一郎氏が「素粒子物理学における自発的対称性の破れの発見」で、2008 年度ノーベル物理学賞を受賞されたことを受け、LEX America では、『量子力学の冒険』英語版に、南部氏の序文を掲載、2nd Edition として発刊しました。同本は、National Science Teachers Association(NSTA) のブックレビューでも高い評価をいただいています。

日常の多言語活動

ヒッポの多言語活動は、ことばを外国語として勉強するのではなく、どのことばも「同じ人間のことば」として捉え、習得していきます。

日常の活動には家族や様々な世代のメンバーが集い、多言語の自然習得体験やホームステイ交流での体験を共有しています。活動を通し、自然にどんなことばにも心を開き、同じ人間として向き合い、コミュニケーションできる人材が育ってきています。今期は、全国で約40名の研究員（フェロウ）が誕生、約50ヵ所で新しい活動場所（ファミリー）がスタートしています。新しいファミリーが誕生することで、メンバーが参加できる場が広がり、地域全体がことばの育つ豊かな“言語場”になってきています。

地域社会の国際化への貢献として

全国各地にて講演会を開催

地域での講演会の様子

地域の国際化への一助として、また多言語活動について広く知っていただく機会として「7ヵ国語で話そう」をテーマに、全国各地で教育講演会・セミナーなどを企画、開催しました。

今年度は、JR北海道の後援を受けたJRタワーホテル（札幌）での講演会をはじめ、全国約300ヵ所にて開催。参加者総数は21,000名余にのぼりました。各講演会の実施にあたっては、文部科学省をはじめ、各地域の教育委員会や都道府県、市区町村、新聞社など、各方面から500近い後援、協賛をいただきました。

公立学校での授業協力や地域児童館などでの取り組み

小学校での国際理解授業

地域の公立小中学校からは「総合的な学習の時間」の中で国際理解をテーマにした授業への協力として、約90校から依頼をいただきました。英語教育を導入している小学校からの依頼もあり、留学生・研修生メンバーとともに楽しむ各国のことばや文化は、児童、生徒にとって身近に感じられると好評です。

また、地域の児童館などでは、親子で「多言語と子育てを楽しむ会」を各地で主催したり、地域の子育てイベントにブースやステージ参加などもしています。参加した方からは「親子で参加でき、世界のことばに気軽にふれることができるのがとても嬉しい」などの感想も多数寄せられました。

多言語の環境の充実に向けて

ファミリー活動の動向

お母さんたちを中心に、子育て講座を開催

今年度は、20番目のことばとしてアフリカの言語、スワヒリ語が加わり、日常活動の中で楽しむことばの幅がより広がりました。

今期で2回目のアジア青年多言語合宿交流（上海）には、大学生年代を中心に約100名が参加。中国、韓国、マレーシアなど、同世代の交流を深めました。

また、東京では2009年4月から高大生世代の集うワークショップも始まり、約10ヵ国からの留学生が集い、高校生たちが英語を中心に多言語を交えながら会を進行するなど、青少年年代の活躍が目立った一年でした。

また、子育て中のお母さん世代を中心に、各地域で「赤ちゃんとことばの発達の不思議」をテーマにした会も多数開催。2009年5月には東京都の後援を受け、東京都児童会館で子育て講座を開催し、100名の方に参加いただきました。

50代以上のメンバーが集うシニア世代の活動も活発で、2009年2月には第3回となるシニアフェスタを開催、体験交流を深めました。

ワークショップ等の開催

東京のワークショップでの物理の話に興味津々の子どもたち

多言語の環境である活動の場（ファミリー）の充実や、メンバーの活動の楽しさを広げる場として、ワークショップを開催。毎回、国際交流や研究活動などの様々なテーマを切り口に、メンバーが会の作り手となり、地域を越えて交流する場となっています。今期は各本部所在地のほか、横浜、青森、新潟、福島など、各地でも開催されました。

理事懇談会の実施

多言語活動の提唱者、榊原陽代表理事をはじめとする、理事を囲んでの懇談会は、年間を通して、本部（東京・渋谷）で実施されています。多言語活動のベースに流れる「ことばと人間」についての話題など、毎回が地域を越えた研究員（フェロウ）、メンバーの楽しい体験交流の場として好評です。今年度は各地域でも懇談会が多数開催され、ヒッポの理念や活動について身近に聞ける機会も増えました。

全国各地で、メンバーが活躍しています

各地で通訳ボランティアやイベントスタッフとして活躍

仙台では、野球団の外国人選手家族のボランティア通訳としてメンバーが活躍。また、2009年4月に行われた「ピーウィー国際アイスホッケー八戸記念大会」では、多くのメンバーが通訳やスタッフを務めました。

「まなびピアふくしま2008」で感謝状をいただきました

福島では、「まなびピアふくしま2008（第20回全国生涯学習フェスティバル）」でのステージやブース出展などの活躍や貢献について文部科学省から感謝状をいただきました。他にも各地域で、日頃の活動や体験を活かして、小・中学校では外国籍の児童の学校生活をサポートするボランティア、スピーチコンテストの審査員、国際交流協会で理事や会長を務めるなど、地域と世界を結ぶ草の根の支援事業で活躍しています。

大学、高校、他団体からの依頼による特別講義の実施

国立大学法人富山大学では、教養教育の特殊講義に、言語交流研究所スタッフが7年連続で講義を担当。愛知県立岩倉総合高校では選択科目の韓国語の講師依頼を受け、9年にわたり授業を担当。また、大阪府立箕面高校では国際理解教養講座で講演しました。他にも、東京工業大学の留学生へのガイダンス、全国各地の小中学校や公民館などからの依頼を受け、講義や講演を実施しました。

富山大学の講義では、地域の小学生メンバーも多言語や体験談を披露しました

テレビやラジオに出演

仙台では、「スーパーJチャンネルみやぎ（東日本放送）」の中で、「聞いてまねるだけ、テキスト使わず多言語習得」というタイトルで、様々な年代のメンバーが、普段、多言語を口にして楽しんでいる様子などが紹介されました。

愛知県では、「RADIO SAN-Q FM84.5MHz」（愛知県）で海外からのゲストを迎え、ヒッポのホームステイ体験談や多言語ならではの楽しい話題を3年に渡り放送しました。また、FMラジオつくば「What's Tsukuba」（茨城県）では、受け入れホームステイの体験談が紹介されました。他にも、FM茶笛「気ままにティータイム」（埼玉県）や、FMさせぼ（はっぴい！FM）「気ままにティータイム」（長崎県）などの番組に、メンバーが多数ゲスト出演しました。

各地の国際交流イベントに参加

横浜では、「横浜国際フェスタ2008」と、横浜開港150周年記念イベントとして認定された「横浜国際フェスタ2009」にブース及びステージ参加をし、多言語が飛び交うヒッポの日常の活動や国際交流体験の紹介をしました。また、世界のお土産がもらえるスタンプラリーなどで来場者と交流しました。他にも、名古屋での「ワールド・コラボ・フェスタ2008」、大阪での「ワン・ワールド・フェスティバル」、福岡での「アジアマンス」など、各地域の国際交流支援事業に多数参加。海外の方や来場された方々と交流を深めました。また東京・多摩市、千葉・木更津市、松戸市など多数、パネル展も開催しました。

横浜国際フェスタ2009では、ステージでパフォーマンスも

活動体験レポートや各国語スピーチコンテントで受賞

茨城では中学生メンバーが、「行動～地球と私のためにできること～」をテーマにしたエッセイで、「JICA国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト2008」に入選、筑波国際センター所長賞を受賞の他、「英語インタラクティブフォーラム（茨城県教育委員会等 主催）」で茨城県議会会議長賞を受賞しました。また、岐阜・美濃加茂市では小学生メンバーが、韓国青少年交流の体験報告の作文で美濃加茂市の賞を受賞しました。

大阪「ワン・ワールド・フェスティバル」ではブース参加

各地域で「赤ちゃんとことばの発達の不思議」の会を開催

愛知万博後の行事でロシアブースを開きました

MITの教授を迎えての東京の会で、量子力学の劇を披露

名古屋「ワールド・コラボ・フェスタ」では、留学生も活躍

千葉・松戸市では駅前ギャラリーで写真展を開催

国際交流活動

ヒッポの国際交流プログラムは「ことばと人間」に出会う冒険です。日常の活動の中で多言語に親しみ、たくさんの人たちとことばを交わしながら、皆で出発までの準備をしていきます。ことばの自然な習得体験を通して、互いの国に家族のような親しい友だちをつくることができます。

今年度は、アメリカ、カナダ、コスタリカ、メキシコ、タイ、韓国、中国、マレーシア、台湾、オーストラリア、イタリア、オーストリア、スペイン、ドイツ、フランス、ロシアの16の国や地域とのホームステイプログラムを実施。約1,100名が海を渡り、110の国や地域から約3,500名を日本のメンバー家庭に迎えました。

新しい交流先の開拓および交流プログラムの充実に向けて

家族交流 [コスタリカ、メキシコ、韓国、中国、マレーシア、台湾、イタリア、スペイン、フランス、ロシア]

家族（社会人、こども連れ、シニア世代など）で参加できる「家族交流」では、10の国と地域に、メンバー約400名がホームステイしました。

自然がいっぱいのコスタリカ交流は2回目の実施

25周年を迎えたフランス交流は、最初に交流が始まった南仏アヴィニョンで実施。当時交流に参加したメンバーも20年ぶりに参加し再会を喜びました。20年前、アヴィニョンの代表者は「日本人は別の惑星の人と思っていたけれど、同じ人間だった！」とヒッポのホームステイに感動し、その後「Antipodes（地球の反対側）」という団体を設立、現在まで相互交流が続いています。また、パリでは相互交流団体の一つの「Les amis du Japon（メッス）」の会長と合流、在パリ日本大使館文化広報室長を表敬訪問し、ヒッポの活動や交流を紹介しました。

フランス家族交流では、現地の学校を訪問、こどもたちと交流

スペイン・バルセロナ交流では、バルセロナ市の日本領事館に表敬訪問し、スペイン語や多言語を交えての活動紹介などをプレゼンテーションし歓迎を受けました。

秋の中国・上海交流には約25名が参加。北海道をはじめ全国からお父さんメンバーも多数参加し、帰国後も各地域の交流報告会に参加するなど、交流が続いています。

スペイン家族交流で、在バルセロナ日本領事館をメンバーと訪問

また、今年で2回目となるアジア青年多言語合宿交流（上海）は、前回に引き続き、在上海日本総領事館、（財）海外技術者研修協会（AOTS）からの後援をいただきました。今回は、約100名が参加。日本だけでなく韓国やアメリカのヒッポメンバーや、インドネシア、マレーシアからも参加者が集いました。アメリカから参加したメンバーは、多言語活動をテーマにした歌をつくり、合宿中に英語から、日本語、韓国語、中国語などへ、参加者それぞれの国のことばにしてみんなで楽しむなど、多言語での交流の輪がアジアに大きく広がってきています。

上海の合宿で背丈より高いキャンプファイヤーを準備した大学生たち

青少年交流 [アメリカ、メキシコ、タイ、韓国、マレーシア、台湾、オーストラリア、イタリア、フランス、ロシア]

今年度は、小学5年生から大学生年代のメンバー約650名が、10の国や地域へホームステイ交流に出かけました。親元を離れ、一人で10日間～1ヵ月間を現地で過ごすホームステイプログラムでは、異文化を学びながら、家族の一員になる貴重な体験をします。

アメリカ青少年交流には、日本をはじめ、韓国やメキシコからもメンバーが参加しました。ウィスコンシン州にステイしたメキシコの青少年メンバーのホスト家族は、交流後、メキシコ国境まで出向き、メキシコの家族との対面が実現するなど、家族同士の交流も深まりました。

春のオーストラリア青少年交流では、現地の自治体に表敬訪問し、英語をはじめ多言語で活動紹介をしました。他にも、イタリア青少年交流では、新しくフィデンツァとも交流が始まっています。

アメリカのホスト家族とチェスで真剣勝負

オーストラリア青少年交流では、現地の自治体を表敬訪問

韓国のホスト家族と一緒に、キムチを作りました

マレーシアの大家族に囲まれて

ロシアでは、ロシア語で、毎日、本当の姉弟のように遊びました

メキシコでは、陽気なホスト家族が出迎えてくれました

ヒッポ イヤーロング〔高等学校交換留学〕プログラム

アメリカの学校生活を体験

イヤーロングプログラムは、世界9ヵ国（アメリカ、カナダ、メキシコ、オーストラリア、イタリア、オーストリア、スペイン、ドイツ、フランス）に、全国から76名の高校生が参加しました。現地でホームステイをしながら学校生活を体験するプログラムは毎年好評で「たくさんの人との出会いの中で自分自身が成長できた」などの体験談が世界各国から届きました。また海外6ヵ国（メキシコ、ブラジル、ドイツ、オーストリア、ルーマニア、モンゴル）からは、交換留学生14名を約1年間、日本の家庭に迎えました。

海外からの研修生、留学生などの国内ホームステイの充実

受け入れ交流プログラム

PTPの受け入れで来たアメリカの子と習字をしました

あらゆる国籍、年代の方々（企業や各国大使館・領事館等に研修で来日している方、留学生、相互交流をしている諸団体）との受け入れ交流プログラムを、年間を通して実施しています。

今年度は、1泊2日から1年間の長期ホームステイまで、約100団体からの依頼を受け、110の国と地域から約3,500名が日本のメンバー家庭でホームステイを体験しました。

とても陽気なチュニジアから来た男の子たち

今期は、アメリカの国際交流財団ピープル・トゥ・ピープルインターナショナル（PTP）が主催する、異文化交流と国際親善を目的としたプログラム「学生交流大使プログラム（Student Ambassador Programs）」でアメリカの中高校生を、1グループ約40名、全国で約700名を各地域のメンバー家庭で受け入れました。神奈川地域では、日本の中高生が交流会を主催しアメリカの中高生たちがヒッポの活動を楽しんだり、お茶や習字も満喫しました。受け入れした家族からは「初めは緊張したけど、すぐに打ちとけて、あっという間の4日間だった。今度は自分がアメリカの家にホームステイすることを約束しました」という感想が寄せられました。また、来日グループのリーダーからは、「何度か来日しているが、これまでで一番素晴らしい交流だった」とのことばもいただいています。

JDS事業（人材育成支援無償事業）の受け入れでは、バングラデシュの人とすぐに仲良しに

JICAからの感謝状

イタリアからは、ゴールデンウィークの家族交流で訪れたパルマの団体が初来日し、ヒッポの受け入れホームステイとして相互交流が始まりました。来日中は、パルマでホームステイをしたメンバーとの再会を楽しみました。

フィンランドとチュニジアからのゲストが来日した際は、両国のゲストを合わせての交流会も実現。英語、フランス語、フィンランド語などが飛び交う楽しい場となりました。

またJICA東京（（独）国際協力機構）から、長年の来日研修員の受け入れホームステイへの協力について、ヒッポファミリークラブに感謝状が授与されました。

アメリカ4-Hクラブとの相互交流

インターン生受け入れ

Jessica Robinson

アメリカ4-Hクラブ（アメリカ政府農務省が管轄下に置く青少年の教育団体）からインターン生を毎年受け入れしています。今年度は、メイン州よりJessica Robinsonさんが来日し、2008年9月より1年間ホームステイをしながら、ヒッポファミリークラブ本部（渋谷）で研修をしました。Jessicaさんはヒッポの日常活動に参加するほか、ホームステイや交換留学プログラムの準備、小中学校の国際理解授業、春のタイの青少年交流プログラムにも参加するなど、活躍してくれました。

【2009年度　国際交流参加実績】

国・地域	家族	青少年	YL	合計	国・地域	家族	青少年	YL	合計
アメリカ	–	161	34	195	台湾	22	82	–	104
カナダ	–	–	3	3	オーストラリア	–	19	2	21
コスタリカ	17	–	–	17	イタリア	13	20	2	35
メキシコ	74	10	3	87	オーストリア	–	–	1	1
タイ	–	15	–	15	スペイン	13	–	11	24
韓国	97	197	–	294	ドイツ	–	–	6	6
中国	72	–	–	72	フランス	20	9	14	43
マレーシア	23	24	–	47	ロシア	54	98	–	152
					合計	405	635	76	1116

世界でヒッポファミリークラブが紹介されました

ヒッポの交流プログラムや活動が、世界各国の新聞で紹介されました。

Le lycée Grignard accueille sept correspondants japonais

●フランス
Cherbourg
「LA PRESSE DE LA MANCHE」
2009.4.8
春フランス青少年交流で、グリニャール高校との交流が3年目を迎えたことや、現地でフランス文化に触れたり、浴衣を着せるなど、相互に文化交流を楽しんだ様子が紹介されました。

● U.S.A.
Illinois
「THE FREEBURG TRIBUNE」①
2009.8.20
アメリカ青少年交流で、イリノイ州を訪れた参加メンバーが、ホストフレンドと共に地元の新聞に紹介されました。

Kapelski Family Hosts Japanese Exchange Student

①

Oregon
「The DAILY ASTORIAN」②
2009.8.14
アメリカ青少年交流で、オレゴン州を訪れた参加メンバーが、4-H の地域役員を訪れた際の様子が紹介されました。

②

●ロシア
ハバロフスク
「ХАБАРОВСКИЕ ВЕСТИ」
2009.7.31
1991 年来続いている、夏のロシア青少年交流のプログラムが紹介されました。

●韓国
釜山
「News Letter
Asian riend Vol.22」
2008.11
夏の韓国交流に参加した青少年メンバーたちの釜山での2週間のホームステイの様子などが紹介されました。

Kelab Hiroshima tertarik kuih tradisional Langkawi

●マレーシア
Kuala Lumpur
「Sinar LANGKAWI」
2009.3.31
春マレーシア交流に参加した青少年メンバーたちが、ランカウイ島でマレーシア伝統のケーキ作りを体験した様子が紹介されました。

海外のヒッポファミリークラブ

LEX America / LEX Language Project / Language Research Foundation

ケンブリッジのファミリーのメンバーと

ボストン近郊に4つの活動場所があり、現地メンバーが活動を楽しんでいます。

以前よりヒッポに協力してくださっている、MIT のスザンヌ・フリン教授を 2009 年 3 月に新たに LEX America の理事として迎え、5 月には日本での講演会が実現しました。

また、幼稚園から小学生低学年向けに、多言語の活動を 20 人ほどのこども達と楽しむ「アフタースクールプログラム」を開始。

"Kumi Greissman 交流スカラーシップ" の援助により、今年度はアメリカから、日本やアジア青年多言語合宿交流(上海) にメンバーが参加。多言語体験をメンバーが互いにシェアするなど、有意義な交流となりました。

LEX Mexico / Club Familiar Hippo A.C.

2009 年春には、チワワからもメンバーが大勢来日しました

メキシコシティ、クエルナバカ、チワワ、アカプルコに加え、新しくアグアスカリエンテスで活動が始まり、現在 10 ヵ所で約 250 名のメンバーが活動を楽しんでいます。

毎年恒例の合宿は、今期はチワワで実施。日本からの交流参加者のほか、メキシコ各地からのメンバーが集まり、チワワの市庁舎で開催された歓迎レセプションで交流を楽しみました。

また、『フーリエの冒険』のスペイン語版がメキシコ国立自治大学（UNAM）から出版され、出版記念イベントが開催されました。

Hippo Family Club 韓国

「ソウル国際幼児教育展」のブースにはたくさんの方が訪れました

韓国はソウルを中心に、クァンジュ、チンジュ、テグ、チョナンの 12 ヵ所に活動場所があり、約 400 名のメンバーが活動を楽しんでいます。

今期は、「ソウル国際幼児教育展」に 2008 年秋と 2009 年春に出展。日本から応援メンバーも参加し、来場者にむけて多言語活動の紹介をしました。また、青少年交流は、日本、アメリカ、台湾へ韓国からも参加。初のロシアへの家族交流も実現しています。

研究活動・広報・制作

「ことばと人間」をテーマにした研究部門 トランスナショナル カレッジ オブ レックス

「ことばと人間を自然科学する」をテーマに、大学生年代の学生が集まり、大学に通いながらでも参加できるカレッジとして、研究活動に取り組んでいます。

今期は昨年度に引き続き、森重文氏の『極小モデル』（代数幾何）に取り組み、約10名ほどの大学生が互いに講義をしながら研究活動を進め、夏と春にはまとめとなる小冊子を発行しました。

「極小モデル」に取り組んだ成果を小冊子としてまとめました

また、春にはトラカレの研究発表会、またシニアフェロウ（研究協力者）による、小学5年生以上を参加対象にした連続講座「オープントラカレ講座」を実施。今年で4回目となる講座には、全国から親子で延べ1200名が参加し、好評を得ました。

オープントラカレ講座にはたくさんのメンバーが集いました

【2009年度 オープントラカレ講座 講師一覧】
（講師敬称略・開催順）

中村 桂子	（生命科学理学博士／JT生命誌研究館館長）
藤村 靖	（言語音声学者／オハイオ州立大学名誉教授）
塚原 祐輔	（（株）理研ジェネシス代表取締役社長／凸版印刷株式会社ライフサイエンス事業推進部長）
南 繁行	（大阪市立大学大学院工学研究科教授）
丸山 瑛一	（独立行政法人理化学研究所 イノベーション推進センター特別顧問）
永井 清陽	（ジャーナリスト・元読売新聞ローマ・パリ・ロンドン支局長）
山崎 和夫	（京都大学名誉教授）
坂田 明	（ミュージシャン）
赤瀬川 原平	（作家・画家）

新しい文字システムの開発　ヒッポレターシステム

ヒッポレターシステムは、音文字としてのローマ字と意味文字としての漢字を合わせて用いるヒッポオリジナルの文字遊びです。

今年度は、地域でのワークショップや講演会、本部懇談会などで、ヒッポレターシステムのプレゼンテーションをしました。また、インターネット上でヒッポレターシステムを使ったやりとりができる「多言語チャット」を制作。高大生を中心に、海外メンバーともレターシステムを使ってのやりとりが楽しく始まっています。

出版 / 『フーリエの冒険（スペイン語版）』の出版

『フーリエの冒険』がスペイン語に翻訳され、ラテンアメリカで最大規模のメキシコ国立自治大学（UNAM）より『Aventuras con FOURIER』として、2008年11月、メキシコで出版されました。

UNAMのDr. Luis de la Pena氏とAna Maria Cetto氏の夫妻が、英語版を見て興味を持たれ、スペイン語版の翻訳が実現しました。翻訳はメキシコ市自治大学（UACM）のM.C.Jose Luis Gutierrez S.氏。監修はDr. Luis de la Pena氏。

『フーリエの冒険』のスペイン語版は、日本語、英語、韓国語、中国語に続き、5ヵ国語目の発刊となります。

広報 / ホームページ、機関紙による情報発信

発刊9年目を迎える機関紙「ひっぽしんぶん」では、年4回の季刊発行で、全国のメンバーの体験談や地域での最新情報に加え、研究活動を機軸にした情報を発信しています。メンバーの方や全国の講演会、体験会に参加された一般の方々に広く配布されています。

公式ホームページでは、日常活動やイベントの案内、ホームステイ交流の様子なども、さらに楽しく見ることができます。

制作 / 新しいマテリアルの完成

今年度は、新ストーリーCD「世界に広がる、多言語仲間！」のスワヒリ語が完成し、20ヵ国語の活動になりました。スワヒリ語の制作は、現地の録音事情などの理由で一時中断していましたが、LEX Americaの働きかけにより、アメリカでの録音が実現しました。

今後の取り組みについて

ワークショップなど、地域の会の充実

2009年度は、メンバーが地域を越えて交流するワークショップなどが各地で開催されました。内容は、ヒッポの研究協力者であり2008年にノーベル物理学賞を受賞された南部陽一郎氏の理論「対称性の自発的破れ」に迫るフィールドワークや、赤ちゃんとことばの発達についてのフィールドワーク、『記紀万葉』などを通して日本語の成立を探っていくフィールドワークなど、多岐にわたっており、今まで以上にメンバーの交流範囲も広くなってきています。

今後も、メンバーの活動の楽しさが広がるワークショップや、研究や日常の多言語活動体験をシェアする地域の会を、フェロウやメンバーが中心となり、一緒に作っていきます。

MIT言語学スザンヌ・フリン教授を招いての会を実施

2008年、2009年に続いてマサチューセッツ工科大学（MIT）の言語学者スザンヌ・フリン教授が2010年5月に再来日し、東京、新潟で特別講演会を開催します。講演テーマは「人間はどのようにことばを獲得するのか？」。今回はスザンヌ・フリン教授に加え、言語脳科学者である東京大学の酒井邦嘉准教授の講演もあり、ヒッポの多言語実践活動で見つけてきたことと合わせて、多角的に「人間のことば」に迫ります。

また、前日本物理学会会長の坂東昌子氏、理化学研究所の丸山瑛一氏、米・レッドランド大学の元教授である大和田康之氏らとともに教育関係者向け講演会も別日程で開催し、これからの言語教育について広く考えていきたいと思います。

アジア青年多言語合宿交流（上海）

2008年から始まった上海でのアジア青年多言語合宿＆ホームステイ交流第3回目を2010年夏にも開催します。

毎回、日本、中国、韓国、マレーシア、インドネシアなどアジアを中心に合計で約100名が参加。2010年は、参加国、人数ともにこれまでの規模を上回る合宿の開催にむけて準備をすすめていきます。合宿地は、中国上海市郊外の太湖大学堂を予定。中国上海を舞台に、アジアの青年たちの国を越えた交流の場を今後も育てていきます。

マレーシアでの新しい青少年交流の実施

主に大学生年代を対象にした上海での青年多言語合宿＆ホームステイ交流が大好評を博していることを受け、「多言語」で交流することの面白さをもっと若い年代のこどもたちにも広げていくために、2010年夏より「アジア青年多言語自然キャンプ＆ホームステイ交流」を実施します。対象年代は12歳～高校生年代、5泊6日のキャンプ生活をアジアの青少年たちと一緒に体験し、その後、2泊3日のホームステイを楽しみます。マレーシアならではの自然体験、そして多言語体験を思い切り楽しむことができる新しいプログラムが、相互交流でお世話になっているマレーシア教育省の全面的なバックアップで実現します。

大学生活動の活発化

2008年度より始まった大学生活動を充実させていきます。

東京での月に一度の高大生ワークショップを始め、2009年夏からは名古屋でも高大生の会が始まっています。

この活動の中で育った大学生年代のメンバーだけでなく、新たにヒッポの活動を始める若者世代を含め、多言語を通してこれからの国際社会で活躍していく世代を育てていきます。

新しいマテリアルCDの制作

現在の20ヵ国語に加え、新たにベトナム語を加え、21ヵ国語の活動にしていきます。また2010年夏には、「世界に広がる、多言語仲間」シリーズにマレーシア語が加わる予定です。

中期的な計画としては、世界の歌を集めた「Sing Along! Dance Along!」シリーズの新作を準備しています。

「ことばを歌え！こどもたち」の英語訳版、韓国語訳版の制作

言語交流研究所の代表理事である榊原陽の著書『ことばを歌え！こどもたち』（筑摩書房刊）の英語訳版の制作も始まりました。翻訳は『フーリエの冒険』『DNAの冒険』の翻訳者でもあるAlan Gleason氏。2010年中には完成させ、今後の海外での活動の展開にも活用していきたいと思います。

また、以前から進めていて一時休止していた韓国語訳版の制作も再開し、2010年中の完成を目指します。

沿革

1981年	10月	・言語交流研究所設立（東京都新宿区に本部事務所設置） ・ヒッポファミリークラブ（多言語自然習得の実践部門）発足 ・4ヵ国語（スペイン語・韓国語・英語・日本語）の活動を開始
1982年	7月	・アメリカ、韓国交流始まる
1983年	7月	・カナダ交流始まる
1984年	4月	・トランスナショナル カレッジ オブ レックス（研究部門）開校
	9月	・ヒッポファミリークラブ家族会員（会費）制度の新設
	11月	・ヨーロッパ（フランス、ルクセンブルク、スペイン）交流始まる
	12月	・ドイツ語・中国語・フランス語を加え、7ヵ国語の活動になる
1985年	4月	・代表理事 榊原 陽著『ことばを歌え！こどもたち』（筑摩書房）発刊
	8月	・東京本部事務所とトランスナショナル カレッジ オブ レックスを東京都渋谷区に移転
1986年	3月	・ドイツ交流始まる
	12月	・通商産業省主催「地域の国際セミナー草の根国際交流をいかに進めるか」基調講演（講師：代表理事 榊原 陽）
1988年	3月	・メキシコ交流始まる
	5月	・中国交流始まる
	7月	・『フーリエの冒険』出版
1989年	1月	・『人麻呂の暗号』（新潮社）発刊
	12月	・イタリア語・ロシア語を加え、9ヵ国語の活動になる
1990年	8月	・『額田王の暗号』（新潮社）発刊 ・ロシア交流始まる
1991年	3月	・台湾交流始まる
	6月	・タイ語・マレーシア語を加え、11ヵ国語の活動になる
	8月	・『量子力学の冒険』出版 ・タイ、マレーシア交流始まる
1992年	3月	・「多言語誕生10周年 記念フォーラム」開催（外務省、科学技術庁、国際交流基金、世田谷区教育委員会後援 / 東京・昭和女子大学 人見記念講堂）
	5月	・イタリア交流始まる
	8月	・インドネシア交流始まる ・『枕詞千年の謎』（新潮社）発刊
1993年	12月	・オランダ交流始まる
1994年	8月	・ミクロネシア交流始まる
	10月	・ニュージーランド交流始まる
1995年	3月	・アメリカにて『Who is Fourier?』（『フーリエ冒険』英語版）出版

1996年	3月	・『国際協力・交流 NGO 団体年鑑』（外務省監修（社）日本外交協会発行）に登録・掲載
	4月	・アメリカにて『What is Quantum Mechanics?』（『量子力学の冒険』英語版）出版
	7月	・「国際交流フェスティバル」開催（外務省、文部省、国際協力事業団（JICA）、（財）海外技術者研修協会後援 / 東京・東京ビックサイト）
	8月	・イギリス交流始まる
	10月	・「多言語誕生15周年 記念フォーラム」開催（外務省、文部省、科学技術庁、（財）海外技術者研修協会、国際協力事業団（JICA）後援 / 東京・日比谷公会堂）
	12月	・ポルトガル語を加え、12ヵ国語の活動になる ・オーストラリア交流始まる
1997年	8月	・「イヤーロング プログラム（高等学校交換留学制度）」による留学生派遣始まる ・「HIPPO FAMILY CLUB Transnational Youth Camp」開催（外務省後援）
	11月	・『古事記の暗号』（新潮社）発刊 ・LEX America / Hippo Family Club スタート
1998年	2月	・LEX Mexico / Club Familiar Hippo A.C. スタート
	3月	・『DNA の冒険』出版
	8月	・シンガポール交流始まる
	9月	・「青少年フォーラム」開催（外務省、文部省後援 / 東京・日本青年館大ホール）
	12月	・インドネシア語・広東語を加え、14ヵ国語の活動になる
1999年	3月	・チュニジア交流始まる
	7月	・アラビア語を加え、15ヵ国語の活動になる
	12月	・「社会人フォーラム」開催（外務省、文部省、通商産業省、国際交流基金、国際協力事業団（JICA）後援 / 東京・東京国際フォーラム他、名古屋、大阪、広島にて開催）
2000年	12月	・インド交流始まる
2001年	2月	・ヒンディー語を加え、16ヵ国語の活動になる
	4月	・韓国にて『양자역학의 모험』（『量子力学の冒険』韓国語版）発刊
	5月	・Hippo Family Club 韓国スタート
	10月	・「ヒッポファミリークラブ20周年記念フォーラム」開催（東京・東京国際フォーラム）
2002年	2月	・台湾語を加え、17ヵ国語の活動になる
2003年	4月	・Sing Along! Dance Along! ⑥⑦、Extra 発刊 ・アメリカにて『What is DNA?』（『DNA の冒険』英語版）出版
	8月	・トルコ語を加え、18ヵ国語の活動になる ・韓国にて『파동 의 모험』（『フーリエの冒険』韓国語版）発刊
	10月	・『枕詞の暗号』（新潮社）発刊（『枕詞千年の謎』改題／文庫版） ・LEX America と Hippo Family Club が統合し、LEX America / Hippo Family Club / Language Research Foundation（公益法人組織）として設立 ・Hippo Family Club 韓国が非営利法人として登録
	12月	・「多言語活動誕生25周年記念フォーラム」開催（外務省、（独）国際協力機構（JICA）、朝日新聞社後援、（株）日立総合経営研修所協賛 / 東京・日比谷公会堂）

2004年	3月	・ハワイ・ホノルル交流、カナダ・オーロラ観測交流始まる
	5月	・Hippo Family Club 台湾スタート
	10月	・スウェーデン語を加え 19 ヵ国語の活動になる
		・アジアンクルーズ交流始まる
	11月	・『冒険 CD ブック 1 フーリエの冒険～第 5 章～微分<英語版>』出版
2005年	1月	・「国際理解フォーラム」開催（文部科学省後援 / 東京・日比谷公会堂他、名古屋、大阪にて開催）
	5月	・トルコ交流始まる
	12月	・スウェーデン、フィンランド、ブラジル交流始まる
2006年	3月	・春の青少年交流始まる
		・『ヒッポレターシステム インターネット時代の文字表記法』出版
	4月	・「ヒッポファミリークラブ 25 周年記念フォーラム」開催（外務省、文部科学省、(独)国際交流基金、(独)国際協力機構(JICA)、(財)海外技術者研修協会(AOTS)、朝日新聞社後援、(株)日立総合経営研修所、(株)JTB 協賛 / 東京・東京国際フォーラム他、名古屋、大阪にて開催）
	8月	・オーストリア、ブルネイ交流始まる
	9月	・『冒険 CD ブック 2 量子力学の冒険～第 5 話～ E. シュレディンガー『さらば、マトリックス』<英語版>』出版
		・新マテリアル「世界に広がる、多言語仲間！」発刊
2007年	2月	・南アフリカ交流始まる
	3月	・LEX America が、LEX America / LEX Language Project / Language Research Foundation と名称を変更
	8月	・「ヒッポ イヤーロングプログラム 10 周年記念 高校留学多言語フォーラム」開催（外務省、文部科学省後援 / 東京・国立オリンピック記念青少年総合センターにて開催）
	12月	・コスタリカ交流始まる
		・台湾にて『數學嗆聲班（基礎班・進階班）』(『フーリエの冒険』中国語版(繁体字版))発刊
2008年	4月	・オランダ交流始まる
	8月	・第 1 回アジア青年多言語合宿交流（上海）の開催
		・マテリアル「カバジン」シリーズの 7 ヵ国語単言語版発刊
	11月	・メキシコにて『Aventuras con FOURIER』(『フーリエ冒険』スペイン語版) 出版
2009年	5月	・特別講演「多言語について」開催（講師：Dr. Suzanne Flynn MIT 言語学教授 / 文部科学省後援 / 東京・学習院創立百周年記念会館 正堂にて開催）
	8月	・スワヒリ語を加え、20 ヵ国語の活動になる

【活動場所所在地（都道府県別）】

2009.9 末現在の所在地数
（ ）内は 2009 年度の新開設数

アメリカ		メキシコ		韓国			
ボストン周辺	4(1)	メキシコシティ	3(1)	ソウル周辺	8	天安(チョナン)	1
		チワワ	4(1)			光州(クァンジュ)	1
		クエルナバカ	1			大邱(テグ)	1
		アカプルコ	1	アグアスカリエンテス	1	晋州(チンジュ)	1

【トランスナショナルホームステイ 実施国・地域及び交流参加者数】

（2008.10 ～ 2009.9）

欧州（NIS諸国を含む）		
アイスランド	－	1
アゼルバイジャン	－	2
アルバニア	－	3
アルメニア	－	1
イタリア	35	18
ウクライナ	－	2
ウズベキスタン	－	24
英国	－	11
オーストリア	1	2
オランダ	－	3
カザフスタン	－	5
キルギス	－	17
クロアチア	－	1
スウェーデン	－	5
スペイン	24	9
セルビア	－	2
タジキスタン	－	4
デンマーク	－	1
ドイツ	6	35
ノルウェー	－	15
ハンガリー	－	1
フィンランド	－	7
フランス	43	64
ベラルーシ	－	3
ポーランド	－	3
ボスニア	－	2
ヘルツェゴビナ		
モルドバ	－	1
ルーマニア	－	1
ルクセンブルク	－	7
ロシア	152	129

北米		
米国	195	713
カナダ	3	7

中東		
アフガニスタン	－	13
イラク	－	1
イラン	－	4
シリア	－	4
トルコ	－	5
パレスチナ	－	1

アジア		
インド	－	91
インドネシア	－	178
カンボジア	－	15
シンガポール	－	48
スリランカ	－	11
タイ	15	109
韓国	294	697
中国	72	344
ネパール	－	10
パキスタン	－	12
バングラデシュ	－	30
ブータン	－	12
フィリピン	－	97
ブルネイ	－	5
ベトナム	－	118
マレーシア	47	152
ミャンマー	－	32
モルディブ	－	13
モンゴル	－	29
ラオス	－	19
台湾	104	33
香港	－	36
マカオ	－	3

中南米		
アルゼンチン	－	4
アンティグア・バーブーダ	－	1
エクアドル	－	1
エルサルバドル	－	4
グアテマラ	－	3
コスタリカ	17	3
コロンビア	－	3
ジャマイカ	－	2
チリ	－	3
ドミニカ共和国	－	7
ニカラグア	－	4
パナマ	－	1
パラグアイ	－	5
ブラジル	－	5
ベネズエラ	－	6
ペルー	－	4
ボリビア	－	2
ホンジュラス	－	1
メキシコ	87	20

大洋州		
オーストラリア	21	23
サモア	－	2
ソロモン諸島	－	1
トンガ	－	1
ニュージーランド	－	12
パプア・ニューギニア	－	3
フィジー	－	7

アフリカ		
ウガンダ	－	2
エジプト	－	4
エチオピア	－	2
ガーナ	－	6
ケニア	－	12
コンゴ共和国	－	1
コンゴ民主共和国	－	3
ザンビア	－	5
シエラレオネ	－	1
ジンバブエ	－	3
スーダン	－	1
セネガル	－	2
タンザニア	－	6
チュニジア	－	16
ナイジェリア	－	5
ニジェール	－	1
ブルキナファソ	－	1
ベナン	－	1
マダガスカル	－	4
マラウイ	－	13
モーリシャス	－	2
ルワンダ	－	3
レソト	－	1

訪問数　相互交流国または地域　　来日数　受入交流国または地域

※表中の数字は、それぞれの参加人数

【海外ホームステイ交流団体・ホームステイ来日団体グループ】

アメリカ：LEX America、アメリカ4-Hクラブ、FACE、Premium International Exchange、Global Education and Culture Exchange、Nacel Open Door、PTP、バージニア工科大学、Semester at Sea、米国北東部日本語教師会ほか
カナダ：アルバータ4-Hクラブ、Nacel Canada Inc.、STSほか
コスタリカ：サンホセ・プンタレナス・モンテベルデ有志グループ
メキシコ：LEX Mexico（メキシコシティ、クエルナバカ、チワワ、アカプルコ）ほか
ブラジル：Connection Line、Nacel Internationalほか
インド：AOTSインド同窓会（デネ支部・バンガロール支部・デリー支部・チェンナイ支部・ムンバイ支部・コーチン支部・ハイダラバード支部）、デネ池坊いけばな会、ウイリンカービジネス大学院
インドネシア：AOTSインドネシア同窓会ほか
シンガポール：Hippo Exchange Clubほか
タイ：AOTSタイ同窓会、カセー日本語学校ほか
韓国：ヒッポファミリークラブ韓国、全羅北道庁、釜山・韓日文化交流協会、機会の学塾、全南科学大学、南部大学、東南保健大学、日韓文化交流センター（TOTORO HOUSE）、ソウル市中区青少年修練館、ソウル市西大門区青少年修練館、ソウル市麻浦区青少年修練館、仁川市東北亞Vision21、A・N・A・G・I、韓国現代、淑明女子高校、HOLT、Unilink Korea、春川・蔚山・仁川・大田・金海・晋州有志グループほか
中国：淑徳日本語学校香港サマースクール、AOTS上海同窓会、上海市経済管理幹部学校、上海外国語大学、上海市曹楊新村、杭州烏龍大清村ほか
ブルネイ：SSEAYP（東南アジア青年の船）同窓会
マレーシア：AOTSマレーシア同窓会、マレーシア教育省、ヒロシマ国際クラブほか
モンゴル：Mongolian National Youth Exchange Agency
台湾：ヒッポファミリークラブ台湾、台北市各区国民小学校、台中縣豊原父母成長会、台南・桜橋外語学院、台南市各国民小学校、台南有志グループほか
オーストラリア：南オーストラリア州政府教育省、FACE Oceania
ニュージーランド：ニュージーランド大使館紹介協力校
ミクロネシア：ミクロネシア4-Hクラブ
イタリア：ローマ・ミラノ・トリノ・フィナレリグレ・パルマ・フィデンツァほか各都市有志グループ、WEP
イギリス：Nacel International
オーストリアウィーン有志メンバー、STS
オランダ：ロッテルダムほか有志グループ
スウェーデン：STS、ストックホルム有志グループほか
スペイン：バルセロナ有志グループ、Nacel Espana S.L.
ドイツ：Open Door International e.V.、Euro Vacances、DFSR GmbH、KulturLife、Travel Works、フェヒタ有志グループ、ミュンヘン市民大学ほか
フィンランド：フィンランド4-Hクラブ、ロバニエミ有志グループ
フランス：Nacel France、STS、アビニョン Antipodes、アンジェ Kampai Anjou!、メッス Les amis du Japon、リヨン・リール・アルザス・シェルブールほか各都市有志グループ
ルーマニア：International Education Center Romania
ルクセンブルク：ルクセンブルク有志グループ、Nacel International
ロシア：ウラジオストク・ナホトカ・イルクーツク青年会議所、ウラジオストク第51学校、ハバロフスクGenerator2000、ハバロフスク "STUPENI" Lyceum、ウスリースク有志グループほか各都市有志グループ
トルコ：日土婦人友好協会、チャナッカレ オンセキズ・マルト大学、イスタンブール有志グループ
チュニジア：チュニジア日本友好協会
南アフリカ：ヴェンダ有志グループ

【主なホームステイ受け入れ依頼団体】

- 外務省
- 内閣府
- 独立行政法人国際協力機構（JICA）
- (財) 海外技術者研修協会（AOTS）
- (財) 日本国際協力センター（JICE）
- (財) フォーリン・プレスセンター
- (財) 青少年国際交流推進センター

ほか、各都道府県・市町村の行政府、教育委員会、国際交流協会、諸団体、大学、学校、専門学校からのホームステイ依頼を全国各地域で受けています。

来日＆受け入れ情報NEWS！

2010/9/27再信

＜お問合せ＞
TEL：03-5467-7046 / FAX：03-5467-7064
〒150-0002
東京都渋谷区渋谷2-2-10 青山H&Aビル3F
ヒッポファミリークラブ 国際部 受け入れ係

9月になりました。夏の交流も(暑さも?!)まだ々余韻覚めやらずですが、この秋から30周年を迎えるヒッポ。受け入れも秋冬シーズンに向かってホストファミリーを大募集します。今度は日本の我が家に場所を移して心温まる受け入れ交流を家族みんなでお楽しみください。

来日団体	月 日(曜日)／対面&終了／参加数／希望地域／他	来日紹介／締切日
■ アセアン諸国 (東南アジア青年の船) 現地ホストファミリー来日	対面：10 月 27 日 (水) 終了：10 月 29 日 (金) 人数：7 カ国 14 名 成人男女 来日国：・ブルネイ・インドネシア・マレーシア・フィリピン ・シンガポール・タイ・ベトナム 地域：東京、神奈川、埼玉、千葉、他相談	内閣府主催の『東南アジア青年の船』プログラムではアジア各地で国際交流事業が行われます。同時期に長年現地の受け入れ等でお世話をしている人たちが来日します。国は違いますが、同じホストとしても共有できる受け入れをお楽しんでください。 ※1家庭1～2名の受け入れとなります。 ■締め切り延長：10月15日(金)
■ 内閣府 東南アジア青年の船 異文化理解交流	1day交流：10 月 27 日 (水) 10:30 ～ 15:30 参加数：11 カ国 40 名 大学年代～30才位までの男女 参加国：・シンガポール・マレーシア・インドネシア・ブルネイ・タイ・フィリピン ・ベトナム・カンボジア・ラオス・ミャンマー・日本の11カ国 地域：※当日参加＆対応できる方がホスト対象です。	今秋、第37回『東南アジア青年の船』(主催：内閣府)が約2ヵ月の船上＆アジア各地の国際交流事業が行われます。そのプログラムの一環としてヒッポ訪問＆異文化理解を実施します。毎年好評の1dayホスト募集です！(※宿泊なし)◎地域まとめて受け入れを推進中!ご相談ください。 ＊合わせて当日の会の作り手も大募集！ ■締め切り延長：10月15日(金)
■ アジア@中国他 淑徳日本語学校 秋入学生受け入れ	対面：11 月 5 日 (金) 終了：11 月 7 日 (日) 地域：※まとめて受け入れできる地域&ファミリーを募集！ 人数：15 名 アジア圏(中国系中心)／学生,社会人男女	留学生を長年受けている日本語学校(板橋区)です。ヒッポを通じ、日常の生活体験することで学んでいる日本語理解をより深めたいと、ホームステイを希望しています。今回は、この秋入学生の受け入れです。地域やファミリー等でまとめのお迎え＆受け入れをお願いします！遠隔地域もぜひ、ご相談ください。 ■締め切り：10月4日(月)
■ ロシア㊅ 家族グループ A：ハバロフスク家族 B：ウラジオストク他家族	ハバロフスク：A11 月 19 日 (金) ～ 26 日 (金) ウラジオストク：B12 月 12 日 (日) ～ 19 日 (日) 人数：予定 各 20 家族 親子、夫婦、社会人、学生他 地域：東京、神奈川、埼玉、千葉、他 (ドッキングあり)	毎冬恒例の相互交流先から家族グループが成田経由でやってきます!今夏や今まで受け入れしてくれたホストファミリーも来日&再会を楽しみにしています。来日や参加者の詳細は追ってお知らせします。 ※来日手続きの関係上、早めのホスト決定に何卒ご協力をお願いします。 ■締め切り：A>10月15日(金)／B>10月末
■ ※JICA研修員 ホームステイ交流 (JICA東京) ※独立行政法人国際協力機構	②日程：11 月 27 日 (土) ～ 28 日 (日) ③日程：2011年 1 月 29日 (土) ～ 30 日 (日) 地域：※②③とも、まとめて受け入れ可能な地域&ファミリー 人数：(予定) 各 15 名 成人男女	送迎から対面&交流会等まで地域ぐるみで企画から楽しめる受け入れ交流です。JICA東京(渋谷区幡ケ谷)の研修員も毎回好評のホームステイ体験(今年度は3回実施)です。 ※地域ファミリーごとの受け入れをご計画ください。 ■締め切り：②>9月末、③>10月末
■ マレーシア 教育省 中高生来日 (ヒロシマコクサイクラブ)	対面：11 月 30 日 (火) 終了：12 月 5 日 (日) 人数：(東日本) 95 名 中高校生年代男女 地域：関東圏、その他の地域もぜひご相談ください。	多言語&多文化の中高生たちが、日本の生活&文化を体験します。個々では学校等の訪問希望もあります。ホームステイ終了後は東京TDL観光など行い7日に帰国します。※同年代がいないご家庭も受け入れができます。◎遠距離地域の方も地域ごとにまとまっての受け入れが可能です。ぜひ、ご相談ください。 ■締め切り延長：10月25日(月)
■ 外務省 招へいプログラム 南アジア高校生	対面：12 月 11 日 (土) 終了：12 月 12 日 (日) 人数：4 カ国 40 名 各国：高校生男女9名・引率1名 国：南アジア8カ国中の4カ国を予定 地域：東京、神奈川、埼玉、千葉、他	外務省(南西アジア課)の招待で南アジア地域協力連合(SAARC)加盟国の8カ国(アフガニスタン、バングラデシュ、ブータン、インド、モルディブ、ネパール、パキスタン、スリランカ)から南アジアの将来を担う高校生たち総勢80名が来日します。日本の高校にて訪問交流や産業・文化に触れるなど日本への理解と親善を深めます。ヒッポでは4カ国を受け入れ予定です。その他、外務省や関西方面を訪問し17日に帰国します。※同年代がいないご家庭も受け入れができます。 ■締め切り：10月末
■ 韓国㊅ 青少年来日交流	対面：12 月 27 日 (月) 終了：2011 年 1 月 7 日 (金) 人数：予定 100 名 青少年代男女(10～15才)、引率 地域：東京、神奈川、埼玉、千葉、他相談 (ドッキングあり)	毎冬恒例の相互交流先から青少年たちが来日！日本での冬休みを一緒に過ごすことをとても楽しみにしています！ 春、夏の青少年&家族交流、YLに向けて準備の一環としてこの機会にぜひ、ホストファミリーを体験してください。※ 青少年ホストは同性同年代(小4以上で2才差位まで)の受け入れとなります。 ■締め切り：11月8日(月)

‖9月の 来日＆受け入れ‖ ☆ 9/4～5 JDS留学生(D)受け入れ交流@渋谷&京王、中央B地域 ☆ 9/18～19 JICA研修員受け入れ交流@池袋地域

Language Station hippo

・・・受け入れ申し込みについて・・・
受け入れ家族調査表(両面)には、受け入れ可能人数含め連絡先等漏れなく記入の上、写真を添えてフェロウ経由にてお申し込みください。来日メンバーやゲストに伝わるよう、テキストを参考にして英語や相手のことばで、イラスト&レターシステムなども活用して書いてみましょう。※ホストファミリー決定は必ずしも先着順ではありません。また希望が定員数を超えたり、諸事情により来日が変更中止などにより、受け入れできない場合もあるのでご了承ください。

〈発信元〉ヒッポファミリークラブ 国際部 受け入れ
TEL:03-5467-7046 / FAX:03-5467-7064

2010 ☆笑って泣いて驚いた～Transnationalな我が家の受け入れ♪ ★★〈感想文紹介〉★★

●多言語のあるくらしを受け入れから～
フェロウの皆さん、受け入れの作り手になりませんか?!
地域、ファミリーで一緒に楽しみましょう!

受け入れが終わると、ほどなくしてホストファミリーより感想文と写真がヒッポに届きます。その度に今回の交流体験はどんなだったかな?ドキドキする瞬間でもあります。思わずニンマリしたり、胸がジーンとしたり、オドロキの発見があったりetc・・・毎回感動がいっぱい、感謝でいっぱいです。
今回は、この12月も来日する南アジア高校生たちの引率先生受け入れを紹介します。

★ 南アジア高校生招へいプログラム(6/26~27)ホスト家族：木全さんFamily@埼玉県とDhan Bdr. Tamangさん(fromブータン)

♪楽しかったこと、なんでもいっぱい書いてください。ご家族みなさんでどうぞ。

ブータンの民族衣装を着て現れたタマンは、37歳の引率先生。
120世帯の小さな集落で、85人の小学校低学年の子の学校を一から立ち上げた校長先生。
車の通れる道まで、ジャングルの中を歩いて10時間(！) 野生のトラ、ゾウ、クマもでる～～～！！
県庁のある町まで月に1度、山を降りていく生活。奥さんと次女はそこに住み、10才の長女はより良い教育のため首都のティンプー(そこまで車で7時間！)にいる。
今の学校が軌道にのったら、来年あたりまた別の集落で学校を創るんだって。
村には電気も電話もなく、パソコンはソーラーで動く。写真を見せてもらったけど、山の斜面に学校があり、小さな棚田がいっぱいあって・・・・・。すごいところから、日本のこの川口の家まで来たんだなぁ。
Life is hardと言う、そのコトバが現実となって感じられた。ブータンは九州くらいの広さに70万人の人口。木を1本切ったら2本植える、森を大切にし、人口もあまり増えないよう子どもは最大4人までらしい。彼から、すごーく色々なことを学んだし、色々と感じ、考えた。
24時間のステイで5才の(息子の)陸人とサッカーをし、西松屋で娘の服を買い、100均でおみやげにあめ玉をたくさん買い、夜は ヒッポの持ち寄りWelcome・・・忙しかったー; 陸人は最近、成長してシャイになったのか?? 以前のようにゲストと無邪気に遊ばなくなった。でも2日目の朝、出発直前で陸人とタマンが部屋で2人で何かして遊んでいる声が聞こえてきて嬉しかったな～(覗いてみたかったナ！)
帰国前日の歓送レセプションには、母の のんのんと一緒に参加して、他の国やブータンの子たちともいろいろ交流できて楽しかったです。

♪今回の受け入れで言葉(音)の発見はじめ、面白かった体験やちょっとしたエピソードなどありましたら教えてください!

ブータンは谷ごとに言葉が違うというくらい、多言語の国でした。公用語は、英語とゾンカ語で、タマンは、ネパール語、シャションカ？語、タマン語、少しヒンディ語も。
タマンは日本語もすぐにマネして、「おいでー」「おはよー」etc使ってた。多言語人間だな～
ゾンカ語の音、すごく面白い！クズジャポン(こんにちは)、カディチェ(ありがとう)、ブゾ(息子)、ブン(娘)。
1(ジー)、2(ニー)、3(スン)、4(シー)、5(ガ) なんて(日本に)そっくり！

●対面式会場にて～家族揃って記念写真!

＊感想上↑木全弓美子さん ・下↓Dhan Bdr. Tamangさん(ブータン)

I am extremely glad to be Living with the Host family for atleast a night. They have taken so much pain to come to a Tokyo Prince Hotel to accompany me to their beautiful and very clean home, Where the family Live very happily with the sense of complete hospitality and Kindness. 'Kadinche/Arigato Gozaimasu' for ~~Showing~~ everything you all did for my Sake.
Your Hippo family club Getogather was another new activity which I have seen for the first time in Japan. The program was very very entertaining and good enough to help building unity among the Hippo families. I truly enjoyed your Hippo program and going to miss it very badly after my departure to Bhutan. Please extend my heartfelt gratitude to all the Hippo family who were present in the Hippo club on the evening of 26th June, 2010. 'Arigato Gozaimasu' to me and all.

● ヒッポの持ち寄りWelcomeに参加して～Hippo体験中 皆でSADAを楽しんでるところ♪

※感想文とお写真は、ホストファミリーに了解をいただいて掲載しています。

HOLLAND
U.K.
GERMANY
FRANCE
LUXEMBOURG
SPAIN
ITALY
TURKEY
TUNISIA
RUSSIA
CHINA
KOREA
JAPAN
THAILAND
TAIWAN
INDIA
MALAYSIA
SINGAPORE
INDONESIA
AUSTRALIA
NEW ZEALAND
MICRONESIA
CANADA
U.S.A.
MEXICO
BRAZIL
Hippo Transnational Homestay

教育講演会『7ヵ国語で話そう』　後援：文部科学省・東京都教育委員会

特別講演｜多言語で子育て！

赤ちゃんに学ぼう

人間はどのように ことばを獲得するのか？

『最新の脳科学』と、『多言語における言語獲得研究』の両面から
ことばと人間を捉える

■日時

2010年5月23日(日)

午後1時30分～4時00分(開場 午後1時)

■会場

なかのZERO 大ホール

東京都中野区中野 2-9-7　(定員1292名)

会場地図

●ＪＲまたは東京メトロ東西線の中野駅南口から徒歩８分

■参加費

参加費 500円（一般・会員）
託児あり（一般の方のみ）
(事前申込制／先着順／お子様お一人につき1000円)
参加費・託児費は当日、受付でお支払ください。

■お申し込み方法についての詳細は、
本紙裏面をご覧ください。

■プログラム

1. 講 演

『Raising Multilingual Children』

Dr. Suzanne Flynn
マサチューセッツ工科大学
言語学教授

● 多言語は人間の知能（知性）の自然な状態。
さまざまなレベルにおいて重要でポジティブな
結果をもたらし、それは生涯にわたって続きます。
(英語での講演／字幕つき)

『言語の脳科学』

Dr. 酒井邦嘉
東京大学大学院 准教授

●「言語の脳科学」それは文系・理系の枠を越えた
新しい融合領域。
そして言語の本質は創造的であることです。

2. ことばの教育について
科学者や教育関係者の意見

坂東昌子（愛知大学名誉教授、京都大学基礎物理研究所 研究協力員）
丸山瑛一（理化学研究所特別顧問）
大和田康之（在米国 国際基督教大学財団理事）

3. 多言語で子育てを実践中の
ママやパパの体験談

■お問い合わせ：フリーダイヤル 0120-557-761（受付時間：平日9時～18時）　■ホームページ：http://www.lexhippo.gr.jp/

■主催：言語交流研究所 ヒッポファミリークラブ
トランスナショナルカレッジ オブ レックス　〒150-0002 東京都渋谷区渋谷 2-2-10 青山 H&A ビル 3F

■講師紹介

◆ Dr. Suzanne Flynn
MIT（マサチューセッツ工科大学） 言語学教授

スザンヌ・フリン教授は、幼少の頃から母語以外のことばを話すことに対して興味を持ち、1983年コーネル大学にて学位を取得。現在、米国マサチューセッツ工科大学にて言語学および多言語獲得研究の教授として活躍中です。

ノーム・チョムスキー（1928～）の学説として有名な「普遍文法（Universal Grammar）理論」も含め、30年以上にわたり人間の言語獲得の秘密や環境を研究してきました。その結果、「多言語を話すことは人間にとって自然である」「人間の言語獲得能力には限界が無い」「自然な多言語環境／体験は人間の知性を伸ばす」「多言語人間は認知症になり難い」などのユニークな学説を提唱しています。

◆ 酒井 邦嘉
東京大学大学院 准教授

1964年、東京に生まれる。87年、東京大学理学部物理学科卒業。92年、同大学大学院理学系研究科博士課程修了。理学博士。同年、同大学医学部助手。95年、ハーバード大学医学部リサーチフェロー。MIT（マサチューセッツ工科大学）言語・哲学科客員研究員を経て、現在、東京大学大学院総合文化研究科准教授。

言語に規則があるのは、人間が言語を規則的に作ったためではなく、言語が自然法則に従っているからである――。こうしたチョムスキーの言語生得説は激しい賛否を巻き起こしてきたが、最近の脳科学は、この主張を裏付けようとしている。実験の積み重ねとMRI技術の向上によって、脳機能の分析は飛躍的な進歩を遂げた。こうした背景の中で、失語症や手話の研究も交えて、言語という究極の難問に脳科学の視点から挑んでいる。

著書 『言語の脳科学』『科学者という仕事』
『遺伝子・脳・言語』（中公新書 刊）など

言語交流研究所とは

「ことばと人間」を研究テーマに、多言語の自然習得及び多国間交流の実践を通して、言語と人間の科学的探究を進め、国際間の理解と人類の共生に寄与することを目的に設立された民間の団体です。

複数のことばを同時に習得する多言語活動の実践部門「ヒッポファミリークラブ」※と、「ことばと人間」についての科学的探究を進める研究部門「トランスナショナルカレッジ オブ レックス」で構成されています。

※ヒッポファミリークラブでは、スペイン語、韓国語、英語、日本語、ドイツ語、中国語、フランス語の7ヵ国語をベースに、複数のことば（多言語）を勉強ではなく、赤ちゃんのように自然に習得する活動をしています。それに加えて、家族・青少年など幅広い年代層を対象としたホームステイプログラムや、一年間の高等学校交換留学プログラムなどの国際交流を積極的に行っています。

教育講演会「7ヵ国語で話そう」

教育関係者向け 特別講演
『人間はどのようにことばを獲得するのか？』

■講師　Dr. Suzanne Flynn（MIT 言語学教授）
Dr. 酒井邦嘉（東京大学大学院 准教授）

■日時　2010年5月22日（土）
午後2時～4時30分（開場1時30分）

■会場　（財）日本教育会館（東京・神保町駅）

■参加費　500円　■定員　150名

■お問い合わせ

フリーダイヤル0120-557-761（受付時間：平日9時～18時）
言語交流研究所 ヒッポファミリークラブ

■お申し込み方法

【一般】◇下記のお申し込み用紙にご記入の上、FAXにて言語交流研究所・東日本（FAX番号03-5467-7040）までお送りください。
※後ほど、お申し込み内容の確認の為、ご連絡させていただく場合がございます。
◇お電話（フリーダイヤル0120-557-761）、ホームページ（http://www.lexhippo.gr.jp/）からもお申し込みいただけます。
◇お申し込みいただいた方には参加受付ハガキをお送りいたしますので、当日ご持参ください。

【会員】◇会員の方は、所属のフェロウへお申し込みください。
※お申し込み多数の場合は先着順とさせていただきますのでご了承ください。

FAX用お申し込み用紙（切らずにこのまま送信してください）　FAX：03-5467-7040

どちらかに○をつけてください。 1．5/22（土） 教育関係者向け　2．5/23（日） 多言語で子育て	
ふりがな お名前	お電話番号
ご住所　〒	
参加のきっかけ　1．（　　）さんの紹介　2．ポスター　3．学校からの案内　4．その他（　　）	
参加人数　　人（ご本人様を含む）	託児希望（23日のみ）〔　　才〕〔　　才〕〔　　才〕

※ご提供いただいた個人情報は、当団体が定める「個人情報に関する基本方針」に従って、厳重に管理いたします。また、当団体は、業務の承継先以外の第三者に個人情報を提供することはございません。

ひっぽしんぶん

Language Station hippo No.47

言語交流研究所
ヒッポファミリークラブ 代表理事 榊原 陽
東京都渋谷区渋谷2－2－10 青山H&Aビル
0120-557-761（平日9:00～18:00）
http://www.lexhippo.gr.jp/

Language and human beings

榊原 陽の部屋

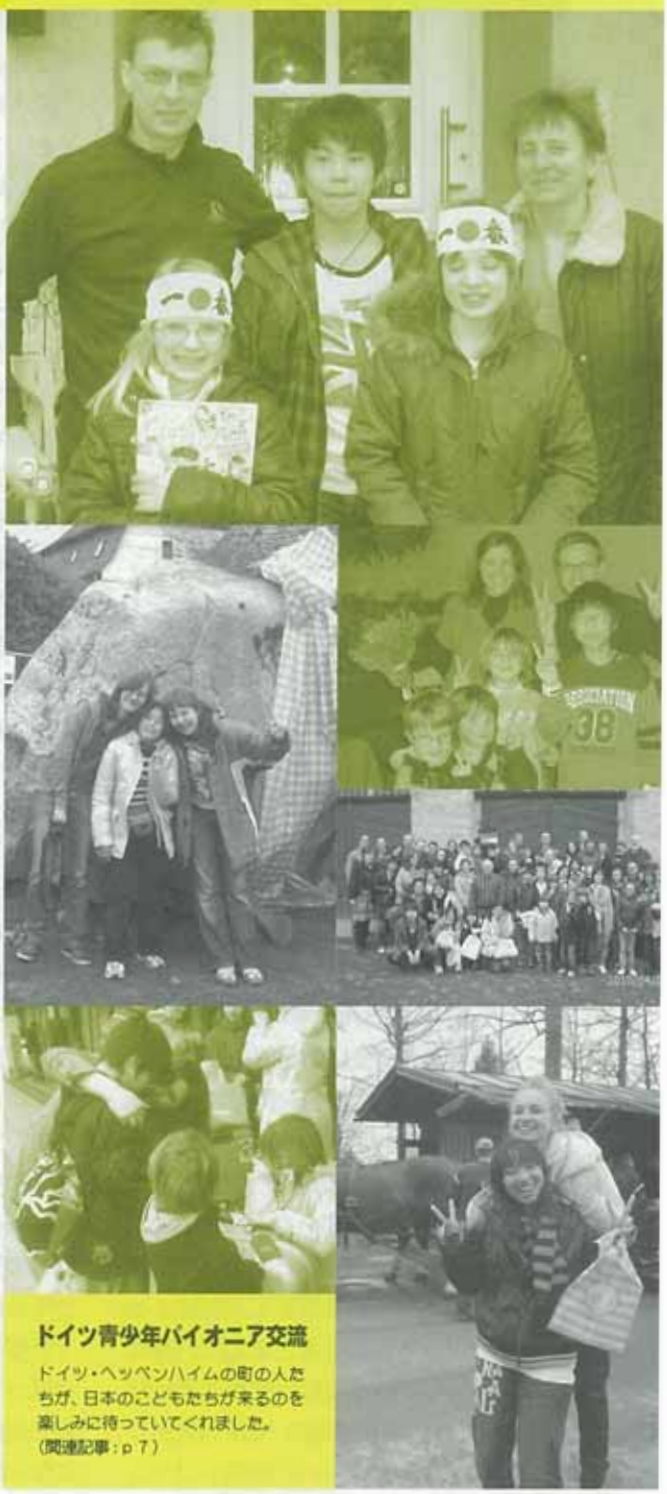
「こえやあ？」

生後３ヵ月のMちゃんのお母さん曰く「うちの子、もうとてもお話上手なの。一人でいる時はあまり話さないのに、誰かが近づくと急に目をキラキラさせてお話して笑うのよ。話し相手が来た～！って思うみたい」。普通なら「親バカね」と笑われるか、ジョークと受け取られるのがいいところだろう。でもこの懇談会に集まってくる人たちにとっては、飛びつきたくなるようなテーマになる。そのMちゃんが、申し分なく一人の人間として確かに話し始めていると思えるからである。

２歳になったKちゃんのお母さんは「うちのKったら最近『こえやあ（これは）？』って次々に指差して聞いてくるの。『トマトよ』って教えてあげると『トマトかぁ』って言うんだけど、それがさも深く感心したみたいな言い方をするから可笑しいの。『こえやあ？』『アスパラガスよ』『アチュ～～かぁ』って適当にそれらしく合わせてくる。ちゃんと言えなくても平気。多分本当に知りたいんじゃなくて、私とやりとりするのが楽しいんだと思うの」。

それを聞いてまた別の人が「あ、それ私がドイツにホームステイした時に似ている！」と言いだした。お散歩しながらホストファミリーのママと“Was ist das（あれは何）？”“Das ist･･･（あれは…）”と延々と繰り返しているだけで幸せな気分になったという。「本当に知りたくて聞く時もあるんだけどね。大抵は答えの中身はどうでもよかったりするの」と笑った。

「自然なことばには常に全体がある」と榊原さんは言う。大人はともすればことばを人から切り離し、部分的に扱うことに偏りがちだ。ことばが独りで練習する対象になったり、表面的に覚えるためのパーツになったりする。そこへいくと赤ちゃんたちは何にもわかっちゃいないとみることもできるが、一番肝心なことは既にわかっているとみることもできる。つまり相手と共振するのがことばであるということをちゃんと知っているのだ。（S）

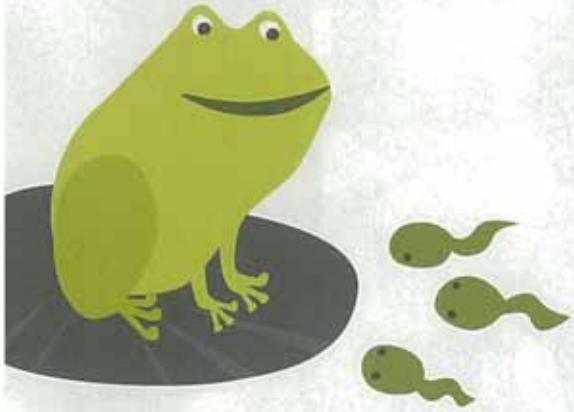


ドイツ青少年パイオニア交流

ドイツ・ヘッペンハイムの町の人たちが、日本のこどもたちが来るのを楽しみに待っていてくれました。
（関連記事：p 7）

My Hippo Story
私とヒッポ

▲耀哉くん（右）と京悟くん（6歳・左）



こどもに学ぶこと

増田 里江子（ますだ りえこ／三重・四日市市）

長い間、英語が話せるようになることにこだわっていた私。ヒッポに入っても英語には苦手意識が…。いろんな国の人の受け入れは、何度となくやってみた。マレーシアのブランドンを受け入れした時のこと。一緒にお風呂に入るくらい仲良しになった8歳の息子が、ある時ブランドンと話しているうちに泣き出してしまった。しばらくして泣き止んだ息子に「大丈夫？涙止まった？」と聞くと「ブランドンがね、大きい子は泣かないんだよって」。「でもブランドンは英語で言ったんだよね」と私が聞くと「でも何となくそう言ってるように思えた」と言った。お別れの夜、ブランドンに英語で手紙を書きたいと言い張った息子は、"Thank you！"と慣れない文字で書いた。ブランドンのことばで伝えたい！そんな気持ちで相手と仲良くなることを息子に教えられた瞬間だった。

そんなことを何度となく重ねていくうちに、だんだんと英語がわかると思うようになっていった。初めは受けつけなかった多言語のCDも、とっかえひっかえ聞きながら、ヒッポの会に参加し、たくさんのメンバーに会うことで、ずいぶん耳も育ってきたと実感するようになっていった。やがて10ヵ国語くらいが何となく受け入れられるようになった頃、それ以上はどれだけ増えても抵抗がなくなった。逆にことばが増え、多言語で聞くうちに引っ掛かる音が増えて面白い！と思うようになった。もしかしてことばって簡単かも…？！

息子が生まれてからの8年間は子育てに夢中であっという間だった。きっとこれからはもっと早く過ぎていくのだろう。親離れする前に、一緒にいられる今をもっと楽しもうと思えてきた。ヒッポに参加してなかったらこんなふうに思えなかったかもしれない。そういえば、こどもたちが小さかった頃、私がファミリー（日常活動）でヒッポに集中しようとすると邪魔をしてくるので、よく苛々していた。今ではそれも可愛く思える。あと何年私に付き合ってくれるんだろう。これからも親子で過ごす時間を大事にしていきたいと思う。

妻のつぶやき

三石 有花（みついし ゆか／長野市）

ある日、客用の茶碗をしまいながら「またお客さんが来たら使おうね」と言うと「うちにお客さん来たことないじゃん」と息子。私は唖然として「だって、ほらこの間ノルビーが来たでしょ」「その前はベンもヨンも…」と我が家にホームステイした人たちの名前を並べると「でもお客さんじゃなくて、全部友だちだよ」と。これにはとっても驚きました。長野の山あいで育った私が初めて会った外国の人は、中学校のAETの先生で、英語は出会った時から「勉強」でした。そんな英語コンプレックスだった私がヒッポに出会い、以来、息子はいつの間にか私とは違う感覚を身につけていたんです。息子はどこの国の人とでも、遊びながら自然にことばを交わしています。人と人の間にことばがあるんだと、こどもから教えられた気がしました。初めの頃はヒッポを敬遠していた主人も、今では「いろんな人と会っているうちにことばって話せるようになるのかな」と一緒にヒッポをやってくれるようになり嬉しいです。

夫のつぶやき

三石 祐司（みついし ゆうじ）

【長男6ヵ月の頃】 急に妻の長電話が増えてきた。しかも電話口でゲラゲラ笑っていて、テンション高すぎ。「ヒッポって何？」と妻に聞いたけど、要領を得ない。怪しい…。その後、押入れの中から多言語CDの入った大箱を発見。妻の説明も、イマイチどころか全くピンとこない。

中国からの女の子を受け入れたいと妻から頼まれる。あまりにいろいろ言ってくるので、最後には「わかった」と答えた。「で

娘が変わった

小山 綾子（こやま あやこ ／ 東京・大和市）

◀小山さん家族。左から2番目、優子ちゃん。綾子さん（右から2番目）は市川さんの姉

◀友人やご近所さんともヒッポを楽しんでいる市川さん

▶市川さんとはこれからもずっとヒッポで子育てと、吉田さん

ある時、妹がヒッポの案内を片手に「二人だと心強いから一緒に行かない？」と。お互い子連れで体験会に参加しました。そこで、小・中学生たちが国際交流などの夢を持って生き生きと活動している姿に、我が子もこんなふうに育ってほしいと思い、参加を決めました。

それから３年。長女が10歳になり、いよいよ韓国へ交流に行くことに。それまではファミリーに行っても頑なに皆の輪の中に入らなかった内気な娘が、交流をきっかけにずいぶん前向きになってきたと感じていました。

それが交流から帰ってきてからのことです。小学校の先生と面談がありました。先生が開口一番「ゆうこちゃん、韓国から帰ってきて自信を持った顔つきになりましたね」と。娘に足りなかった積極性や自信を持って取り組むことをこれからどうしたらいいか考えていたところに、交流の話を聞いて、これにかけてみようと応援してくれていたんだそうです。先生は「お母さん！想いが通じましたよ」と言って１冊のノートを見せてくれました。それは私には見せずに提出していた娘の韓国旅行記。彼女の思いが細かく書かれていました。「私は韓国に行ってわかったことがあります。自分から動きださなければ何も変わらないということです。これからは、積極的にいろんなことにチャレンジしようと思いました」。先生はその一文に目に涙を浮かべて喜んでくれました。娘の成長は、先生やヒッポの仲間の応援のおかげ。私もヒッポで、この交流に送り出して本当に良かったです！

子育てはここで

吉田 久美子（よしだ くみこ／さいたま市）

大学時代の友人の家に遊びに行った時、何やら聞いたこともない外国語のCDが流れていました。不思議に思い聞くと、彼女は「実はヒッポというのがあってね･･･」と嬉しそうに話してくれました。ヒッポに参加するうち、彼女の息子が韓国ドラマに反応して韓国語で答えていたとか、海外の人を受け入れた時の話などを夢中で話す友人はとにかく楽しそう。学生時代の彼女は、海外に興味もなく、内向的な性格だったから、まさか家に海外の人を泊めたりするなんて、すごい変化！と感動してしまいました。

そして去年、私は出産を機に、子育てのことを真剣に考え始めた頃、なぜかヒッポのことが頭に浮かびました。早速、友人に連絡を取り、ヒッポのワークショップへ。会場では女子高生が私には何語かもわからないことばで話していて、ものすごい衝撃を受けました。これは一体何だろうと思い、家の近くのファミリーに出かけてみました。そこでは、メンバーの人たちが温かく迎えてくれて、以前から私はここにいたのではないかと錯覚するほど。この雰囲気が気に入って、ヒッポで子育てしようと決めたのです。１歳の息子が、あの高校生のように多言語で自分のことを話したりする日が、親子で待ち遠しい今日この頃です。

も、オレは外国人が来ても会わないから」と言うと「うん、絶対に会わなくていいから」と言われたものの、2DKの狭い我が家では避けられず、一緒にご飯。でも実は初めての楽しさを感じた。

【長男２歳の頃】 走り回る長男に加え娘も生まれ、子守ということでファミリーに行くことに。でもオレは子守役に徹していたので、何語かわからないことばは口にすることは全くしなかった。

◀我が家の趣味は受け入れ！と三石さん家族。中央はインドネシアから来日したノルビー

【長男４歳の頃】 長男の通う保育園に韓国のお母さんがいると、妻から紹介される。その人と「アンニョンハセヨ」と挨拶を交わした。初めて自然に韓国語を口にしてみて、結構楽しかった。

【長男５歳の頃】 妻が急に「ヒッポってやめなきゃいけないかな？」と。家を建てることになり時間もお金も大丈夫かと心配性の妻が聞いてきた。「やめなくていいよ。ヒッポみたいな人間関係は他ではないから」と答えていた。気がつくと、オレ自身、ヒッポの親父仲間と親しくなっていて、休日や会社帰りに週２日はファミリーに出ていたこともあった。妻やこどもが休んだ時に一人で行くファミリーというのも結構楽しい。いろんな人に声をかけてもらい、今まで知らなかった様々なことばを、妻以外の人に教えてもらったりする楽しさも知った。この春、ヒッポの会でフェロウを25年続けている人たちに会った。妻もあんなふうになったらいいのに。会の帰り道「長くヒッポをやってる人たちっていいと思うんだけど、そう思わないか？」と聞いた。オレの中では、フェロウ家族になる決心ができた。妻も嬉しそうだった。家族で、地元長野でファミリーを始めるぞ！

Exchange

受け入れ photo diary

ヒッポでは年間120の国や地域から約5000人の方たちを、家族の一員として受け入れています。何度やってもドキドキする受け入れ。家族の一員のように過ごすといっても、一体どんなふうに皆は過ごしているんだろう？世界中の人たちとの出会いからお別れまで、日常を紹介！

はじめまして

◀ドキドキの対面式。手作りのプラカードを持って（韓国／古田奈穂子）

▲がっぷり四つに組んで…相撲のようになってしまった嬉し恥ずかしご対面のハグ（タイ）

▲ロシアからお父さんにはウォッカ。こどもにはマトリョーシカのお土産

▲ヨンミンと一緒に習字をやった。（韓国／工藤雅也）

ようこそ我が家へ

◀長男がマリオンに、まるで弟に教えるように優しく丁寧にいろんなことを教え始めた。次男があたふたになってしまい、受け入れ途中でメンバー宅にマリオンを預けることになった時「オレはマリオンの兄弟だからついて行く」と長男。（フランス／山田小百合）

▶経済学を学びに留学に来たチャンディニー。ご主人と9歳の息子さんも一緒に来日しているとか。一泊だけだけど、一緒に料理をしたり、着物を着せてあげたり。シンハラ語と英語でコミュニケーション。（スリランカ／渡辺和歌子）

一緒に作って「いただきま～す！」

▲おじいちゃんちで一緒に凧揚げをした。家でガンプラを一緒につくった。少しケンカをした。たくさん「イゴモエヨ」と言っていた。（韓国小学生12歳／横山泰樹）

▲アルトゥルはちょっと無口だったけど、初めて見る回転寿司に大喜びしてくれた。（ロシア／石田裕士）

▲夜ご飯のおかずで、お母さんがユジンに「これはエビっていうのよ」と教えると「エビ」は韓国語で「あっちへ行け」という意味だと教えてくれた。その後、ケンカした時、ユジンが私に「エビ～」と言った。（韓国／五味遥夏）

▲イリアスはいつもニコニコしておしゃべりしてくれる人なつっこい男の子。こどもたちともすぐ仲良くなって、フットサルやペイブレードをして遊んでました。こどもたちも英語とマレーシア語で自然に話していて、びっくり。（マレーシア／本多亜矢）

お客さまとしてではなく

◀胃の小さいSiernaは、いっぺんにたくさん食べられなくて2時間おきに「お母さん～、おなかすいたー」この日も夜の10時に2人で仲良くラーメンタイム。（アメリカ／矢定優依）

◀ガブリが作ってくれたパスタはとってもおいしかった。第一印象はクールで大人っぽいけど、お母さんが作るいなり寿司を見ながら「大好き♪」とニッコリ。（イタリア／山内貴史）

【お詫び】印刷時に一部、写真が抜け落ちてしまい、御迷惑をおかけ致しました。
この紙面が正しいものです。

日本の生活。ヒッポ

◀ロシアの母娘3人がうちにステイした。私の作るみそ汁も料理も残さず食べてくれてありがとう。リダはあでんとみそ汁の作り方が知りたいと言い、オルガはコーンミルクスープを美味しいとほめてくれた。オルガとクセーニャを本屋へ連れて行ったら、夕方遅くに2人でニコニコと帰宅。迷子になっていた間の話をしてくれました。(ロシア/小池美紀代)

▲帰国の子と仲良く日本のお風呂に。「はずかし〜い」(韓国)

▲私と同世代、一人息子もいて、趣味も同じくピアノと、自然と話も盛り上がりました。人見知りの激しい息子も「My sweet baby」と話しかけてもらい、いつのまにか笑顔に。(フィリピン/中西淑子)

▼アメリカの高校生たちと7stepsのゲームをやっちゃった!

◀初めての茶道体験

▶たこ焼きに初めてトライ!(ロシア/笑谷征彦)

▶「幸せなら手をたたこう」をスワヒリ語で歌う親父たちの熱い交流も(タンザニア/小笠原圭吾)

◀韓国のアッパたちは、家族紹介する時にかならず「きれいな奥さん」とか「かわいい娘」とか何か修飾語をつけて家族紹介をしており、僕も真似するようになった。(韓国/東家良行)

▲お別れの時には広東語が出てこなかったのに、それから2日間、芝君が教えてくれた広東語が次々、頭をよぎるように。(香港/朝香愛美)

「おやすみなさい」

◀ジョンはいつもはていねいな日本語を話すのに、私に謝りたい時「すまん、すまん」と言い、「あなた」と言いたい時は「おまえ」と急に言ったのでおもしろかったです。(韓国/中村彩也咲)

▲アンナが帰る日。1歳半の娘が空港で別れる時ひしっと抱きついて号泣。アンナも帰れなくなりそう…。(イタリア/西山朗子)

▶北海道で運良く大雪が降った時。雪かきしたいところを我慢して、ジュヒちゃんにスキーウェアを着せてあげたら、ふわふわの雪の中に倒れこんで大はしゃぎ。「こういうことしたかったの!」と。(韓国/佐々木南京)

また会う日まで

▶最後の日、箱崎ターミナルまで家族全員で見送りに。明日から寂しくなるなぁ。(ロシア/中山依里子)

見たい!聞きたい!ヒッポの現場

げんごろうが行く!

オープントラカレ講座『ことばと人間』

今年で4回目の講座（東京・青山）には、新たに岩田誠氏を講師に迎え、約1200名が集いました。2つの講義から少しだけご紹介！

赤瀬川原平氏の講座から

◆野球の話が特に面白かった。ストライク・アウト・ボール（日本）、ボール・ストライク・アウト（アメリカ）の順番でバッター中心か、ピッチャー中心かで視点のズレがあることを知った。不思議をもって想像するのがおもしろいんですね。　玉川輝代（神奈川15歳）

藤村靖氏の講座から

◆先生の最後の詩のようなことばには感動しました。涙が出てきたのはなぜ？！ことばっておもしろい。　国重晴見（東京）

永井清陽氏の講座から

◆ベルギーのように国内で言語の違いによって地域を分断せざるを得なくなる事があることを初めて知りました。　清水杜織（埼玉14歳）

山崎和夫氏の講座から

◆1年で月は地球から3.8cm遠ざかる。私が生まれてから53.2cm離れたんだなぁ…と思った。　城戸詩子（東京14才）

丸山瑛一氏の講座から

◆ショックレイさんが休暇中に大発明があったと聞いて、発明には偶然がつきものなのかなと思った。　伊藤仁美（東京12歳）

坂田明氏の講座から

◆「デッカイ声で話さないと相手に伝わらない！」「0点がいるから100点がうれしい」とか、先生の考え方は他の大人とちがっていてすごくおもしろかった。点数低くてもそういう役割なんだから、お母さんに怒られたら、そう言おうと思います。　遠谷葵（千葉16歳）

南繁行氏の講座から

◆世界中の車をHEVに変えないと効果はないと聞いて、いつになるかわからないけど、車を買う時は、今日の南先生の話を思い出したいです。　大塚二季（埼玉15歳）

酒井邦嘉氏の講座から

◆10代のうちに10000時間、一つのことにチャレンジしてみたいと思った。　猪井祐人（大阪12歳）

中村桂子氏の講座から

◆教科書で「生き物はつながりの中に」を勉強して、今日、先生から聞いて教えてもらって、人の命は昔の生き物が勇気を出して、陸にあがってくれたおかげなんだと思った。　千代田洋（東京12歳）

講師　岩田 誠

いわだ　まこと：医学博士。東京女子医科大学医学部長、神経内科主任教授、同大学病院脳神経センター長を歴任し、現在は同大学名誉教授。日本を代表する神経内科医。失語症、記憶障害の研究で著名

「ことばを話す脳」

私が"ことば"に興味を持つようになったのは、今から約30年前、失語症の患者さんたちに出会うようになってからです。以来、私は臨床医として、多くの患者さんのことばを失うことの重大な苦しみに接してきました。そして次第に、"ことば"に対する興味は、それを操る脳のはたらきへの関心と繋がっていきました。

人は何故ことばを必要としたのでしょう。個体間のコミュニケーション、思考の道具、記憶の記録など考えられますが、"ことば"と脳とを直接結びつけることは安直にはいきません。人間にとっての"ことば"というものを考える時、患者さんと向き合う現場のほかに、脳の機構に関する医師たち、言語聴覚士や心理学、認知科学、言語学などの異分野の若い研究者たちと自由で活発な議論ができる交流の場があること、それが私の研究にとっての大きな源になってくれています。

脳梗塞にしろ脳の外傷にしろ、失われた脳組織は再生しません。でもリハビリテーションを通して、患者さんの意欲と努力とで相当良くなります。これは脳の言語領域が壊れても、脳の他の仕組みがはたらくようになるからだと思われます。言語の仕組みは元々、脳の左側にあります。失語症の場合、左がダメになったから一生ことばが使えないというわけではなく、言語領域がないとされる右脳や、または失った箇所の周りの組織が代償し、残っている場所、使える場所は、何でも使って新しい仕組みを創りだす能力が人間には備わっている。そのこと自体が、人間本来の素晴らしい可能性なのです。サイエンスでは、こうなるだろうと説明はできても、本当のところはまだわからないことばかりです。ですが、このような患者さんを診ること、日常的な観察から新しい問題を提起するような臨床研究は、患者さんの症状に対して「なぜ？」という問いを発することから始まり、そのことによって、これからの研究の可能性を追求できるものと信じています。（談）

●講師・研究協力者の皆さん（50音順・敬称略）**と今回のテーマ**

- 赤瀬川原平（作家・画家）「ことばと人間」
- 岩田誠（東京女子医科大学名誉教授）「ことばと人間」
- 酒井邦嘉（東京大学大学院准教授／言語脳科学）「ことばと人間」
- 坂田明（ミュージシャン）「ことば・音楽・人間」
- 塚原祐輔（理研ジェネシス代表取締役）「遺伝子の解析ことばの場」
- 中村桂子（JT生命誌研究館館長）「ことばと人間 ーことばが生れるまでの長い道ー」
- 永井清陽（ジャーナリスト／元読売新聞）「言語戦争・ベルギーでは」
- 藤村靖（オハイオ州立大学名誉教授）「言葉の場（The Space Spun by Language）」
- 丸山瑛一（理研イノベーション推進センター特別顧問）「発明の場について」
- 南繁行（大阪市立大学大学院教授／電磁気学）「ことばと人間」
- 山崎和夫（京都大学名誉教授／理論物理学）「宇宙について、相対性理論より」

塚原 祐輔（つかはら ゆうすけ ／ 理研ジェネシス取締役社長）

僕が研究協力者として、ヒッポに関わるようになったのは、ヒッポの研究部門で榊原さんと出会い、『ことばを歌え！こどもたち』（榊原陽著　筑摩書房）を一読したことに端を発しています。この本に書かれていることは、言語というものに対する新しい「概念の発明」なのだと思いました。人間は環境が整えば、大人でも新しいことば（多言語）を習得できる、それは榊原さん自身の経験からの仮説であり、そこを実験し、自分たちの身体で証明しようというチャレンジがヒッポなのだと。これもサイエンスということです。例えば、パンゲア理論（大陸移動説）のように実験からではなく、概念が先にあり、その後、長い時を経て実証され、今では標準理論になっているものがあります。それは実際、目に見えるものではないのですが、僕は、そんな目に見えるものの“向こう側”にあるものにいつもワクワクするわけです。

「場」というものも目には見えません。最近は空気が読めないことを「KY」と言いますが、あれは場の空気が読めないということでしょう。では「場」とは何だと思いますか。科学の世界では、ある時「場」の概念が発明されました。それまでは、電気も磁気も別々のものだと考えられていました。＋の電荷と－の電荷は引き合い、同じ符号の電荷は反発しあうことを説明することばとして、クーロンの法則が発明されました。それは簡単にいうと、2つの電荷間に働く力は、距離の2乗に反比例するというもの。そこには距離というものだけが存在していることになります。ですが「場」という概念が発明されてからは「電磁場」として統一的に捉えられるようになったのです。＋の電荷を置くとそこにはその電荷の場ができます。その場の中に－の電荷を置くと、－の電荷も場をつくりながら互いが「場」の力で引っ張られる。そうした力が働くところを場という概念で説明したわけです。

また、より身近な場といえばアインシュタインが発見した「重力場」でしょう。アインシュタインがすごいのは、リンゴが地面に落ちることを、地球がリンゴを引っ張っているだけでなく、リンゴも地球を引っ張っている、そういう重力場があると考えたところです。その力の働きは目にすることはできても「場」そのものは見えない。その見えないものの向こう側にあるものを見つけて感動する。つまりサイエンスとは、目に見えない向こう側の世界を実証し、万人にわかる普遍的なことばで記述することです。そこに大きな感動があるのです。

言語の場というのはあるのかなと考えると、やはり人間が集い、ことばを交わすとそこには場ができる。独りでは場はできませんね。場をつくって、その中でこれからも体験し続け、みつけていくのがヒッポなのでしょう。ことばは「有限」ですが、その限られたことばで人間が語るものは「無限」なのです。（談）

めめ友 WUNDERBAR！ 青少年パイオニア交流

ドイツ・ヘッセン州、フランクフルト空港から車で30分、アウトバーンから少し入った小さな街へ！

ドイツの家では全員の大きい暖かい愛に包まれて、生きてきた中で最高に幸せな10日間だった。自分の成長にも気づいた。ありのままの自分で大丈夫じゃんと思えた。　塩入あかね（埼玉 15歳）

家族がロシア人だったから、会話はいつもロシア語。ママからピロシキとボルシチの作り方を習いました。学校にもドイツ人以外の人が多くてびっくり。中国語と英語でも挨拶しました。　山崎佳歩（長崎 14歳）

ママはアルゼンチンの人だったので、スペイン語で話したらすごい！って。家の前が劇場だったのでオペラやバレエを観に4回も行きました。お礼に肉じゃがを作ったらレッカー（おいしい）！って言ってくれました。　中村高子（神奈川 14歳）

ことばが全然わからず大変でした。でもすごく楽しかった。別れる時に泣いてしまった。ホストファミリーも泣いてくれて嬉しかったけど悲しかった。もっといたかった。いい思い出ができました。　村上大岳（埼玉 11歳）

ホストファミリーの家の近くにハンターさんが住んでいて、時々自分で狩りをした鹿の肉を持ってきてくれた。ある日、家に帰ると、玄関の中に鹿の脚がころがってたのには驚いたけど、鹿料理はおいしかった。　足立海（岩手 13歳）

I ♥ HIPPO

みんなからの写真、イラストなど投稿を待ってます。

◀笹井慎太郎くん（6歳／札幌）「うるとらまんになるのはあじちょわえよー（大好きです）」と意訳語で自己紹介してくれるようです

チョムスキー博士からのメッセージ

ノーム・チョムスキー博士
"冒険シリーズ"を手に。チョムスキー博士（20世紀後半の言語学のみならず思想・哲学・科学の分野に大きな影響を与えてきた人物）1966年、日本に初めて招いたのは榊原代表

▲MITでは著名な言語学者の二人。フリン教授は"Raising Multilingual Children（多言語で子育て）"をテーマに、この5月ヒッポで講演

◀MITの博士の研究室にて。左からスタッフのエリザベス（LEX America）、酒井邦嘉氏（東大/言語脳科学）、チョムスキー博士、フリン教授、鈴木理事

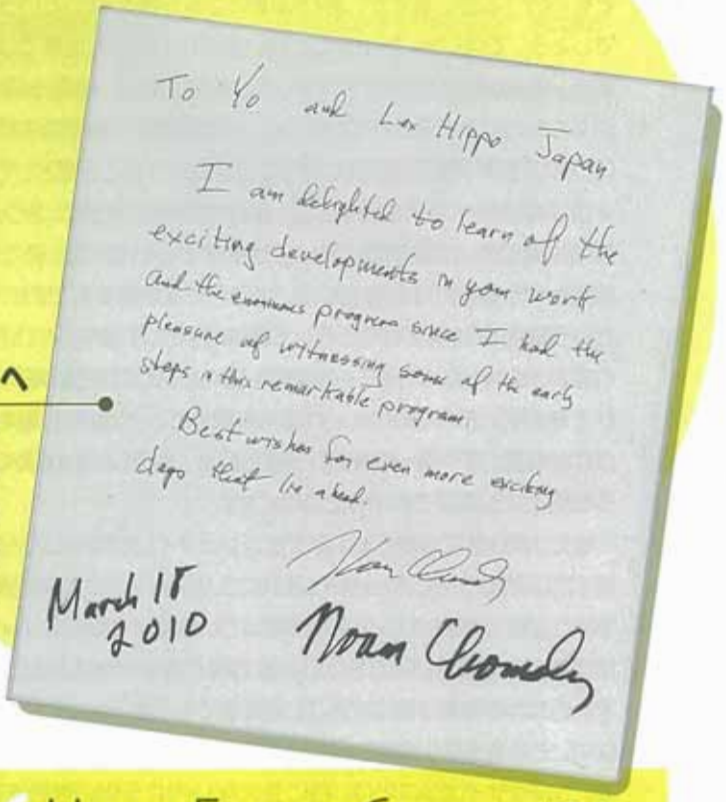
２年前に初来日されたスザンヌ・フリン教授は「もし私が、自分の研究成果に基づいて、ことばのプログラムを作るとしたら、まさしくヒッポと同じものになるでしょう」と話され「このヒッポの活動は、本当に素晴らしい完璧なプログラムです」と絶賛されました。そのフリン教授が３０年以上に亘って研究を続けてこられたMITの言語学と哲学の研究本部に、この春、ノーム・チョムスキー博士を訪ねました。実は、榊原陽代表理事が40年以上も前に、言語学の分野では著名なローマン・ヤコブソン博士やチョムスキー博士等の協力を得て、ボストンに「Language Research Foundation（言語研究財団）」を創設しました。トラカレから出版された"冒険シリーズ"等の書籍は、そこで英訳されアメリカ各地の大学で教科書や参考書に採用されました。それらの成果も含め、チョムスキー博士に、最近のヒッポの多言語活動やトラカレの研究活動などの様子を是非紹介したいと思いました。またフリン教授や酒井准教授がヒッポのファミリー活動にも関心を持たれ、人間の言語というものへの共通の深い関心を基に、ヒッポとの交流を重ねていることもお伝えたかったのです。博士は私たちの活動の発展を知って大変喜ばれました。素敵なメッセージと共に、大きな励ましをいただいたような気がします。

（鈴木聖史／言語交流研究所理事）

榊原陽さん、そしてLexヒッポ日本の皆さんへ

今日、私は、あなたが始められたプロジェクトが、この間本当に素晴らしい進歩と大きな成果をあげられている事を知って、大変嬉しく思いました。あなたがこの画期的なプログラムを始められた初期の頃に、私も少しは関わりを持つ事ができたことを、嬉しく思い出します。これからも拡がっていくだろうこのプロジェクトに、大いなる期待をしています。

2010年3月18日 ノーム・チョムスキー



To Yo and Lex Hippo Japan

I am delighted to learn of the exciting developments in your work and the enormous progress since I had the pleasure of witnessing some of the early steps in this remarkable program.

Best wishes for even more exciting days that lie ahead.

March 15 2010

Noam Chomsky

次回は9月1日発刊予定です！

HIPPO FAMILY CLUB のご案内

ヒッポファミリークラブでは、7ヵ国語の物語や歌のCDを中心に、地域で多言語（現在は21ヵ国語）を活動をしている民間の団体です。世界各国とのホームステイ交流などのさまざまな活動を通じて、世界中に家族同様の友だちをたくさんつくっています。アメリカ、メキシコ、韓国、台湾にも支部があります。

詳しくはホームページをごらんください。

出版物：暗号シリーズ「人麻呂の暗号」他（新潮社）冒険シリーズ「フーリエの冒険」他（ヒッポファミリークラブ）冒険シリーズには英語・韓国語・中国語・スペイン語版もあります。

編集後記 『ひっぽしんぶん』でいつもかわいいイラストを描いてくれているデザイナーの小山友子さんが、ボローニャ国際絵本原画展に入選しました！7月には、板橋区立美術館で巡回展覧会があるそうです。編集部でも皆で観に行っちゃおうと計画してます。（千代田）

デザイン：小山友子

ひっぽしんぶん47号　2010年6月1日発行

ひっぽしんぶん
Language Station hippo
No.49
30周年記念特別復刻版〈上〉
言語交流研究所
ヒッポファミリークラブ 代表理事 榊原 陽
東京都渋谷区渋谷2－2－10 青山H&Aビル
0120-557-761 (平日9:00－18:00)
http://www.lexhippo.gr.jp/

Language and human beings

ことばとは何か

榊原 陽 言語交流研究所・ヒッポファミリークラブ代表理事

2002年 ひっぽしんぶん no.1

全部わかり、楽しんでいる

数年前の正月のことである。当時、6歳、4歳、2歳の孫たちが遊びにきていた。昼どき「ご飯だよ！」と呼びにいった。3人ともテレビを食い入るように見つめて身じろぎもしない。10分ほどすれば終わるだろうと、付き合って見ることにした。番組はサイエンス·コメディーの類で、酸素、水素などのことばが飛び交っている。それらのことばをつなぐことばも、もちろん日常表現ではない。驚いて長男の顔を見た。平然としてプログラムに見入っている。目はおのずと次男に向かう。こちらも魅入られたように振り向きもしない。お兄ちゃんにとっても難解なプログラムなら、こちらは薄暗がりをさまよっているようなものだろう。2歳のソウタ。こちらはまだ日常語も怪しい。

その時、私は「あっ！」と思った。この子たちにはわからないことなど何もないのだ。年相応に全部わかり、楽しんでいる。これまでも私はいつも「全体と部分」、「大波から細かい波へ」と言い続けてきた。ふたたび、そのことばを眼前にしていると思ったのである。

皆と共に音が『溜まる』活動

この1年、私は私たちの活動の中で何かが急激に変化してきているのに気が付いてきた。わずか数ヵ月で7ヵ国語、10ヵ国語などをCDそっくりに言える人々が増えてきている。今までも、そんな人たちが居るにはいた。が、そのような人たちは「特別な人」と分類され、大多数の人は自分たちを「ダメな人」と分類してきた。しかし「言える人」が加速度的に増えるにつれ、それらの人びとの共通点が見えてきた。CDの音を真似ながら、眼と眼が出会い、いっしょに体をオーヴァーに動かしながらやるのが、とてつもなく楽しいというのである。その結果、今までの一人で音を『溜める』活動から、皆と共に『溜まる』活動になってきたというのである。この変化は本質的なことである。溜まった音は必然的に口をついて出てきてしまう。「意味もわからないのに」と言われてきた。

漢字を造ったとされる古代中国人の知恵を見てみよう。意味の「意」の字は、文字通り「音＋心」なのである。音が心を運べば、それが意味なのである。意味を確めて音を発することもなどいるはずもない。

人間にとっての豊かな環境

「赤ちゃんに学ぼう」と言っても赤ちゃんを外側から観察して、その内側で行われていることを知るのは至難のことである。大人にできることといえば、いつまでも自分の中に生き続けている赤ちゃんと出会うことだろう。そこで初めて赤ちゃんの内側で起きている大ドラマが見えてくる。

ひとことで人間の定義はなんだろう。私流に言えば簡単である。人間であれば誰でもその環境で話されていることばを自然に話せるようになる。4つ、5つのことばが聞えてくるルクセンブルクのようなことばの環境があれば、誰もが聞えてくるだけのことばを自然に話す。ことばが混じることは決してない。

すでに「環境」について論じられて久しい。私にとって興味あるのは「人間にとっての豊かな環境」である。「ことばとは何か」こそがその中心的な命題なのではないだろうか。

おめでとう

対談

榊原陽 × 赤瀬川原平

作家・画家・言語交流研究所 理事・トラカレ研究協力者

時間、空間 そして人間

2002年 ひっぽしんぶん no.7

コアがくっきりする実感

赤瀬川：榊原さんと知り合ったのはもう30数年前。榊原さんはその頃、渋谷で仕事を始めておられた。僕は外国語はからっきしダメなんですが、その頃から面白いことをやってるなぁ、って思っていました。

榊　原：あの頃からずっと同じことを考え続けているだけですよ。

赤瀬川：榊原さんの「多言語」とか、「ことばは波である」とか、「自然習得」といったことばへの試みは初めてのことですよね。そういった初めてのことっていうのが、僕は大好きなんです。頭の中にいろんな国のことばの種類が増えるほど、ことばというもののコアがしっかりしてくるって話、なるほど、と思いました。僕は新しい世界にぶつかると、大体構造的に同じだ、と感じられる時にわかるんです。ことばだけじゃなくて、例えば僕は小説にカットを描くなんて思ったことなかったんですね。文章を書くのは好きだったし、絵を描くのもまあ生まれつき好きではあった。それが文章の世界と、絵の世界が交差すると、本当に何か表現とか認識のコアが少しくっきりしていく実感があるんです。

違いの中に普遍性を見つける

榊　原：多くの人が、外国語はそれぞれが全然違う、という錯覚を持っています。ところが、多言語活動を通してみると、言語の普遍的な構造がくっきりとしてくる。今ヒッポは17のことばになっていますが、これからもうちょっと増やそうと思っています。きりのいい20くらいにまずはしようと。トルコ語、スウェーデン語、スワヒリ語なども導入しようと考えています。そういった新しいことばに触れた時、おそらくヒッポの人たちは、○○語に似てるな、という感覚から捉えていくはずです。

赤瀬川：僕は文章を書く時、たとえ話で書くことが多いんです。比喩、アナロジーです。そうするとむしろ、構造的な切り口でものを見るようになる。文章なんか初めは直感ですね。「たとえ」というのは通じる人には通じるんです。とんでもないたとえが見つかると、むしろわかりやすい。

榊　原：一見違うものの中に普遍性が潜んでいる。

赤瀬川：それも実体験がないと、染み入ってこない。

例えば僕にとって犬です。50過ぎまで犬がとても恐くて。ところが女房と娘が小さな捨て犬を拾ってきたんです。僕は無関係でいたんですが、1年くらい経って、台所に顔を出すとね、尻尾を振るんです。なんか波長があるんでしょうね。それでだんだん恐くなくなって。犬が恐くなくなると、犬に吠えられなくなったんです。それまでは犬とすれ違いざまに瞬間緊張してたようで。緊張するってことは戦闘体制の前段階ですから、犬も吠えるんです。でも犬に興味をもつようになると、犬の方も平気で無視して通り過ぎるんですね。相手に寄っていくと見えてくる、そういう面白さです。これがまたことばも通じるんじゃないかとも思うんですよ。ことばもわからないって決め付けていると、絶対にわからない。やっぱり、身をもってわからないと構造は見えてこないですね。身をも

って体験すると構造が鋭く見えてくる。

ことばの名人

榊　原：外国語が話せるからといって、その人にことばの特別な才能があるわけではないんです。本来、どんなことばでも、人間であれば誰でもが当たり前にできることです。むしろあなたのように様々な局面から見事な形で「時空」っていうものを表現できる、そういう人が「ことばの名人」なんだと私は思います。
ことばができるということは相対的なものです。ここからができるというそんな一般的な基準のラインはない。ところが大人は外国語に向かった途端「ちゃんと」言えるようになったら言おうなんて思う。しかしこどもたちを見たらわかることですが「ちゃんと」言えるようになってから言い始めることもはいません。重要なことは、音声は意味だということ。チビたちのまだことばになっていないような音声にも意味がある。意味がちゃんとわかってから話しなさい、なんて言ったなら、話せる子なんかひとりもいないはずです。こどもは大人のように「ちゃんと」という無駄なエネルギーは使わない。常にことばのプロセスはエネルギー最低値の道筋を通っていきます。あなたの本を読むといい文章だな、といつも感心するんですよ。エネルギー最低値ですね。無理して書いてない。

赤瀬川：いやあ、義理で書いたものはだめです。いろいろテーマを与えられてもただ書いたものは。何かちょっとでも自分で面白いと思うことが見つけられると、それをめぐっていける。そういう勢いがないとだめです。

ジカン、クウカン、ジンカン

榊　原：「人間」ということばも考えてみると面白いです。日本ではこれを「ニンゲン」と読みますが、これを「ジンカン」と読んでみるんです。時間（ジカン）、空間（クウカン）、人間（ジンカン）。時間と空間の真ん中に「人間」があって、それを翻訳すると「ことば」なんだと思うんです。空間だけでも、時間だけでも人間は認識できない。ことばがなければ時間も空間もありません。

赤瀬川：ジカン、クウカン、ジンカンですか。面白いですね。

榊　原：家に帰る途中カレーの匂いがしてくる。その匂いも「カレー」ということばとして時間に解いて初めて「カレー」とわかる。カレーと聞くだけでそのものを思い描ける。でもカレーを食べたことのない人はその匂いを思い描くことはできません。大体の人が思い描けるなら、コミュニケートできる。

赤瀬川：物語ですよね。カレーと聞いた時に匂いがするってことは、何百回か食べた自分のカレーの物語なんですね。食べたことのないトリュフなんて言われても物語がないから。野球なんかも、まったく知らない球は打てないらしいです。初物に弱い。新しいピッチャーとか。いろんな球筋、カーブとか直球とか、球筋の物語を見切って打つ、その勝負をやっているらしいですね。

榊　原：僕もあなたのいう老人力というのが相当ついてきたようです。

赤瀬川：僕も相当なものです。

榊　原：自然は常にエネルギー最低値に落ち着いていくんです。ことばも人間も。僕もぼんやりと周りの人に教えてもらいながら楽しんでいこうと思っています。

※トラカレ：「ことばと人間」を自然科学することを目的としたヒッポの研究部門

Happy Anniversary!

I ♥ HIPPO

ヒッポ30周年記念ロゴマークに、たくさんのご応募ありがとうございました。その中から一部をご紹介します。

Congratulations

▲吉岡和奏ちゃん（新潟市／7歳）

◀鶴岡俊之さん（木更津市）

▶篠原彩花ちゃん（富士宮市／5歳）

◀熊谷由里子さん（吹田市）

▶菊池裕大くん（横浜市／10歳）

◀島崎貴弘さん（飯能市）

축하합니다

南部 陽一郎
なんぶ よういちろう

2008年ノーベル物理学賞受賞
シカゴ大学名誉教授 理論物理学
トラカレ研究協力者

自然の現象を追いかけて

2003年 ひっぽしんぶん no.8

編集部より

「南部先生という面白い人がシカゴにいるから会いに行ってみなさい」

榊原陽氏の提案で、トラカレの学生たちが「日本語の5母音の音声秩序」の研究成果や『量子力学の冒険』の著書を携えてシカゴに向かったのは10年程前。初対面の学生の来訪に快く応じ、話に耳を傾けてくださった。とりわけ、日本語の5母音の秩序の話になると、身を乗り出してデータを見ながら、熱心に話を聞いて、いろいろな意見や助言をされた。その懐の深さにすっかり魅了されてしまった。「せっかくだからうちに泊まっていきなさい」という思いもかけないことばに、トラカレ生たちは大喜びで、南部先生宅にホームステイまでしてしまった。一緒に食事をし、話の合間に見た先生のアルバムには、家族のごく日常の写真にまぎれてアインシュタインなどを筆頭にハイゼンベルク、フェルミなど並み居る物理学者と写った写真が無造作に挟まっているのに、学生たちが度肝をぬかれた。

それがきっかけで南部先生がトラカレの研究協力者に就任された。その後は『量子力学の冒険』の英語版の監修を自らかってでてくださり、また来日の際はトラカレで特別講義をしていただいた。(2002.12/3-4講義より)

体験的な実感から物理は生まれる

私はもともと言語には興味を持っていますが、トラカレの皆さんがいろいろな違った立場で言語に取り組んでおられるのを大変面白いと思っています。

ところで物理というのは、自然法則の根本を探るのですが、なるべく広い範囲でものを見ること、そして、人の話を聞くことが大事です。どうしても専門的になる傾向にありますが、意識的にそうならない様、努めています。

また、物理は誰もが持つ体験的な実感がもとになります。例えば物を押すと手に押し返される感覚がある。そういう感覚が作用反作用の法則のもとになります。その感覚をいかに数式で表すのかを考えるわけです。だから数式を見ると現象が思い浮かびます。

理論をつくる3つの段階

物理の理論をつくるには3つの段階があります。まず最初は新しい現象が出てきた時には、その性質をいろいろ調べて、その間に何か法則があるかどうかを調べます。それがあったとしても、そのままではだめです。次にそれを説明するためのモデルをつくります。そのモデルに従って、このような特性があると説明するのです。そしてその後で、いわゆる本質的な理論を考える、つまり、その特性に繋がる数式を書き表します。その理論から計算すれば現象がちゃんと精密に予言できる、あるいは理解できる…、そうなって初めて理論ができあがる段階になるのです。

しかしですね、これで安住できる、ということにはならんのです。自然というものは、面白いもので、何か見つけると必ずそれ以上に複雑で、説明のできない姿を見せる。だから、また我々は最初から探し始める。その繰り返しです。

理論屋が研究するやり方には3種類ある

ひとつは「湯川型」。新しい現象に出会った時、その背後には新しい何かの粒子があると考え、その数式を見つけるんです。湯川秀樹さんの場合は、新しい粒子「中間子」があると言ったわけで、そう言った途端、以降何十年にもわたって、本当に次から次にいろいろな粒子が見つかってきました。この考え方は何十年も我々の頭の中に定着していて、我々の考え方の基礎になっています。現象からのbottom upです。

2つ目は「アインシュタイン型」。こちらは湯川型と正反対で、top downです。まず理論をつくる。こういう理論があるから実験でこういう「何か」が出てくるはずだという考え方です。例えばアインシュタインは、重力場の理論をつくって、空間が曲がっていると言った。曲がっているから、こういうものが出てくる、と言って、そこで予言したものが実際に見つかってきています。

3つ目は「ディラック型」。ディラックという人は「自然の法則は美しくあるべきである」という考え方を貫いていたのです。つまり、数学的美的観念から数式をつくり出してしまう。すると実際にその数式にあう現象が存在することが見つかるのです。ディラックがつくった数式のひとつに「モノポール(単磁極)」を示すものがありますが、これはまだ実際には見つかっていない。そこで現在多くの物理学者がモノポールを探しています。もしかすると、私たちの周り、この辺りにウヨウヨしているかもしれないですよ…。

新しい発想が浮かぶ時

もちろんそれまであらゆることをやっているのですが、ヒントは突然やってくるものです。何故かというのはなんとも言えませんがね。24時間、寝ている時も絶えず頭の中で考えている…。人によって違いますが、私の場合は、主に発想が浮かぶのは夜が多いかもしれません。寝ている時だったり、NYの地下鉄に乗っている時にハッと浮かんだり。細かい計算をしていると頭がこんがらがってきますから、それはコンピューターでやればいい

felicidades

のです。細かい計算をしている時には大局を見ることができない。そこだけしか見えていないですからね。そういう時は、横になって考えてみる。そうすると大局が見えてきて、考えやすい。ふっと数式が浮かんでくることがあります。

今一番面白いと思って取り組んでいること

昔から持っている夢がひとつあります。40年来、そしてこれからもずっと持ち続ける夢。それは「質量の起源」です。つまり、電子やニュートリノなどそれぞれ固有の重さを持っている、それは一体何だろう、何故だろうということです。それは理論で出てくるものなのだろうか、出てこないものだろうか？量子力学では今の段階ではクォークとかレプトンとかの質量に規則性が見えてこないので説明ができない。それについて、数式をたてることができるのかどうか？それとも宇宙の進化にも、生物の進化の場合と同じように、偶然によって生じたものがあって、その中で質量も生まれたものなのか…。

ただどんな考え方をしたとしても、それだけでは話にならない。それに理論をつくって、ちゃんと数式を出せて、ちゃんと計算してある程度の予言ができないとそれは理論にならない。なかなか進展しないのですが、そういうことを頭の中でおもちゃにして長年ころがして遊んでいるんですよ。

▶久川拓也さん
（埼玉・戸田市）

私が初めてヒッポに出会ったのは、今から約20年前、当時の国鉄を辞めて日立でパソコン事業を始めた頃のことで、元国鉄総裁の高木文雄さんのご紹介で榊原陽さんとお話したことがきっかけでした。

その時、ヒッポの自然習得という考え方に興味を持ちましたが、あまり深く関われずに時期が過ぎていきました。その後、長らく忘れていましたが、99年の初めに、勤めていた鉄道総合技術研究所の東京事務所へ突然、榊原さんが訪ねて来られました。お話というのは「この活動を始めてから18年間、いろいろと試行錯誤はありましたが、最近ようやくこの“多言語の自然習得”の活動に確信が持てるようになりました。手伝ってくれませんか」ということで、私も参加することになりました。

それから3年半余り経ち、世の中の外国語会話に対する要望と関心が大きくなってきたように感じられます。また一方ヒッポの活動を内側から眺めて、いろいろなことがわかってきました。「多言語の自然習得」とは、人間ならば誰でも赤ちゃんのうちに周囲で話されていることばを自然に身につけて、3～4歳になれば話せるようになる。もし3つも4つも違うことばが聞えてくる環境ならば、いくつもことばが話せるようになるということです。ヒッポでは、大人も赤ちゃんの言語習得と同じ道筋で「いつの間にか、知らないうちに」ことばを覚えていこうというわけです。

ところが、大人がもう一度赤ちゃんに戻ってやることはそう簡単なことではありません。こどもたちやお母さんたちにとっては馴染みやすい方法であっても、特に男性社会人、即ち一人前の会社人間にとって、初めは難しく感じられるようです。この間、私たちはいわゆる社会人にヒッポを伝えようと、会社組織に働きかけてみたり、社会人対象のセミナーなどを開催したりしてきました。その中で続いているもののひとつが「シニア倶楽部」です。しかし、まだ道のりは遠く発展途上であると思っています。

その一番の理由は、我々大人にとってことばを覚える時に、どうしても「勉強」という姿勢が抜けないということです。例えば、早く言えるようになろうと、昔単語を覚えた時のようにCDを暗唱しても多少の効果はあるでしょうが、やはり家庭や日常の中で多言語に触れることのできる環境をつくることが大切なことだと思います。家族で一緒にヒッポを楽しんでいる人に、長く続けて自然に多言語を身に付けている方が多いのは、決して偶然ではないのでしょう。

ことばの習得には、人と人との出会いが重要です。ことばは人と人を繋ぐものですから、CDから出る機械の音だけ何百回聞いても、それだけでは身に付かないようです。人と人との間で意味を運び、伝えてこそ言語であるわけで、CDは補助手段のひとつでしかないこともわかってきました。やはり、自然にことばを習得していくにはヒッポを「楽しむ」ことこそが最も重要であるということではないでしょうか。

tebrikler

内田 幹和
うちだ もとかず

元日立情報システムズ専務取締役
言語交流研究所 理事

ヒッポはな～に？

2004年 ひっぽしんぶん no.13

私とヒッポとの付き合いは20年位前に遡る。その時に見たファミリーでは喧騒の中でことばの習得をしているのに驚き、その一方で若い人たちがフーリエ解析について目を輝かせて説明してくれたのには感動した。どうやったらこのような人が育つのか、興味をもった。それ以来、毎年開かれるトラカレという学校ともなんとも判らないカレッジの入卒業式に出席した。そこで話されていることは、私が受けた外国語、物理の教育、研究発表とは全くかけ離れており、何回出ても不思議だった。

ところが、最近ヒッポの講演会で、「トランスナショナルの中のトランスということばは"～を超えて"という意味の接頭語です」と言う話を聞いて、ヒッポとは外国語を覚えることや自然科学の勉強を目的としているところではなく、国境を越え、人種、分野を越えて人と人との交流の輪を広げることを目的にしているのかも知れないと気が付いた。そういえば、榊原さんはその著書『ことばを歌え！こどもたち』(筑摩書房)で「隣の国を飛び越えて、遠くの国の人と付き合えるはずがないと思って、韓国語を始めた」という意味のことを書いておられたのを思い出した。人と人を繋ぐのはことばだから、交流のためには、その人のことばで話をする必要があろう。こどもは生まれ出た時から親や兄弟に囲まれ、その話しことばのある場の中で、聞いた音を真似して口から出し、それを聞いた親、兄弟との相互作用の中で育っていく。そこには先生、生徒の関係はなく、人間同士の付き合いしかない。それと同じ場をつくって、自然にことばの習得をしているのがヒッポの「ファミリー(活動)」だろう。そこではストーリーCDの音を聞いて聞えたままを口に出してみることを皆でやり、全員でことばを育てていくようである。この聞えたままを口に出してみるのが秘訣らしいが、私のように「間違えてはならない」と強く教え込まれてきた人間には大変な苦痛で、そこから脱却するのに四苦八苦している。そこを脱却し、音を口に出してみることが楽しくなった大人はすぐにいくつものことばで話せるようになるようだ。

「教える」「教えられる」という関係のないフラットな場の中では、人間が育っている。ヒッポの人は、大人もこどもも日本語での話も上手になり、積極的に発言し行動するようになっているのには感心する。単に外国語としてロシア語「を」話すことはできないが、ロシアの人と話したいと思った時には自然にロシア語「で」話すことはできると言った人もいる。またヒッポのおかげで学業成績や営業成績も上がったとか、ビジネスにも役立ったという話は、この「しんぶん」にも体験としていくつか載っていた。他に、話しことばから始まり、いつの間にか文字も読めるようになり文章も書けるようになったと言う人もいた。確かに、我々もこどもの時、日本語を「聞き」「話す」から「読む」「書く」に進んだのだから、他のことばも同じようにするのが自然なのだろう。

今の世の中の教育は「教」が強すぎて「育」がおろそかになっている気がする。ヒッポは外国語を「教える」「教えられる」団体ではなく、国境、分野を越えて人と人との交流の輪を拡げ、ことばと人が「育っていく」場を提供している団体なのかと今更ながら気が付いた。外国語の知識を一刻も早く吸収して追いつけと言っていた時代は過ぎ、これからの時代には自然に帰ることが必要なのではないだろうか。

▲綾部瑞希ちゃん(流山市/10歳)

永井 清陽
ながい きよはる

ジャーナリスト
元読売新聞ローマ、パリ、ロンドン支局長
トラカレ研究協力者

トンボの眼

2004年 ひっぽしんぶん no.17

編集部：現在、ヒッポの研究部門のシニアフェロウとして、学生や"ひっぽしんぶん"編集スタッフに貴重なアドバイスをくださっている先生ですが、どのようなきっかけでヒッポのことを知ったのですか。

永　井：もう11年前のことになりますが、長かった海外生活を終えて帰国し、連載の執筆を担当していた時のこと。近所でヒッポのチラシを目にし、一体どういう活動だろうと興味を持ち「多言語に挑む」という連載でヒッポを紹介しました。これが、新聞社にびっくりするほどの反響があっただけでなく、ヒッポの本部にも問い合わせが殺到しました。それがきっかけで、以来ヒッポとの関わりができたわけです。

編：先生は海外での生活も長いとか。ヨーロッパなど、多言語の環境に身をおいてお仕事をされてきたそうですね。

永：30代から40代にかけて、海外特派員としてヨーロッパを中心に暮らしていました。短期の訪問まで含めると、世界約65ヵ国での滞在を体験したことになります。ヨーロッパで気付いたのは、日本では「母国語」というのに、例えば、英語では"Mother tongue（母語）"と表現する。「国」のことばではなく「お母さん」のことば、つまり環境のことばを話すという感覚。「国語」「国文学」という意識は日本人特有の考え方です。

編：多くの国でいろいろな経験をされたと思いますが、異文化交流の中で、面白いエピソードがあればぜひお聞きしたいのですが。

永：イタリアに赴任したばかりの頃、「ボナセーラ！（今晩は）」を言うタイミングがわからなくて当惑しました。なぜか「ボンジョールノ！（今日は）」と返ってきたり、その逆だったり…。こんな簡単な挨拶も通じないとはと、何か馬鹿にされたような気になったのですが、そのうち気付いたことがあります。イタリアには昼食後、昼寝（シエスタ）する習慣があるのですが、その昼寝を終えると「ボナセーラ」になるのです。夏は夜10時頃まで明るいので、昼寝をしない多忙な人たちは「ボンジョールノ」の時間が長いというわけです。単語を知っていれば話せるのではなく、その国の文化を理解しなくては、本当の意味では通じないことがわかりました。

編：おもしろい体験ですね。私は、初めて韓国に行った時、女の人たちが立て膝でご飯を食べる姿にびっくりしたことがあります。日本では行儀が悪いとすることが、お隣の国では正座にあたっていたりすることは驚きでした。様々な異文化に触れてきた先生にとって、一番大きなカルチャーショックとはどんなものでしたか。

永：今でも強烈に記憶に残っているのは、初めてカイロに行った時のことです。タクシーを拾って行き先を告げた途端、ドライバーに"How much？"と聞かれたのです。値段を言おうにも、初めてで距離もわからない。そのことをいくら言っても、ただHow much ばかり。適当な値を付けたら、かなり割高であったことを後で知りました。値段というものは、売り手が付けるもので、せいぜい値切るという発想しかない文化圏に育ったものとして、180度の発想の転換を迫られる大きなカルチャーショックでした。

編：「異文化」に触れる体験とは、自分の持っていた価値観の物差しが変わってしまうことでもあるのですね。

永：日本人はどちらかというと「単眼」思考。世界中に異なるものの見方をする人たちが存在するということに触れる機会は大切です。でも、それはわざわざ海外へ行かなくても、日本にいる様々な国の人たちと触れ合うことでも経験できることです。

これからの時代を生きていくこどもたちに、私が送りたいメッセージがあるとすれば「トンボの眼を持とう」ということです。トンボは単眼ではないですよね。世界には様々な考え方、文化が存在することを受け入れる寛容さを持つことが大切です。新しいものに出会った時に、トンボの眼のような複眼思考で見ていけるといいですね。（インタビュー）

▲入澤尚子さん（群馬・みどり市）

赤瀬川 隼
あかせがわ しゅん
作家・直木賞受賞

アガサを偲んで

2004年 ひっぽしんぶん no.18

仕事でちょっと確めたいことがあって、本棚から1冊の本を抜き出した。藤村由加著『人麻呂の暗号』（1989年1月新潮社刊）。

用はすぐに済んだのだが、それから本を閉じるまでが長かった。何度か読んだこの本を、いつのまにかもう一度読み直していたのである。道草だ。いくつになっても道草は楽しい。時が経つのを忘れてしまう。

道草をくいながら僕は、この本を作る過程で原稿の読み合わせなどを手伝っていた頃のことを思い出していた。

藤村由加とは、4人のトラカレの1期生の姓名から、それぞれ一字ずつを採って組み合わせたペンネームで、これからしてひとつの暗号である。万葉集に残る作者名のなかにはこういう仕組みのペンネームもあったのではないかという話も出た。

榊原陽さんのいう、古代日本は多言語のくにであり、とりわけ地理的歴史的に密接な古代朝鮮の言語を無視しては万葉集は読み解けないという観点から始まったこの共同作業は、いわば、ことばの推理ノンフィクションを読み進む面白さがある。だから、読み出したら止まらないということになるのだが、推理ものにふさわしく、この本にはアガサと呼ばれる中年の女性がしばしば出没する。いうまでもなく稀代の推理作家アガサ・クリスティにちなむ。彼女はここというポイントで出てきて、若い藤村由加を叱咤し、貴重な示唆を与えて姿を消す。まこと

Glückwünsche

に恰好いい。だてに齢は取ってないわけで、学生時代から興味を抱いていた記紀万葉に多言語の光を当てて開花させ、常に藤村由加の先を行き、ときには藤村由加に青息吐息をつかせる。それでいて決して知識をひけらかしたり押しつけようとせず、ヒントを与えた後は藤村由加が自力で気付き、解を発掘発見するまで待つのだった。

アガサこと中野矢尾、ヒッポファミリークラブ創設以来のフェロウで、トラカレ発足と同時にシニア・フェロウとしても講義を受け持った。藤村由加は、『人麻呂の暗号』に続いて、『額田王の暗号』(90年)、『枕詞の暗号』(92年)を続々と上梓し、5年後の97年には満を持して『古事記の暗号～神話が語る科学の夜明け』を出した(いずれも新潮社刊)。このいずれにも、アガサは颯爽と登場する。颯爽とはしているが、常に目立たぬように控え目に。そして藤村由加を叱咤し示唆を与えるために出没する回数が、徐々にだが減っていた。藤村由加の自立と成長の度合いに応じたものだろうと思っていたが、それだけではなかった。『古事記の暗号』が世に出てまもなく、中野矢尾さんが入院したということを聞いた。そして99年4月に中野さんは永眠された。

僕らが生まれた時代、一般の家庭では、赤ん坊はたいてい自宅の畳の上で生まれた。僕も僕のきょうだいも皆そうだった。そのとき家に来てくれる人を、「お産婆(さんば)さん」といった。必ずしもお婆さんではなく、中年の人が多かった。今では「助産婦」というのだろうが、語感もイメージもまるで違う。

「そろそろ…」という知らせを受けて家に来てからも決してあわてない。万事に余裕があり、産婦だけでなく、家のなかで緊張している家族たちを無言のうちに落ち着かせる。そうこうするうちに、こどもは寄りつけない奥まった部屋から、けたたましくも元気な産声が聞えてくるのだった。

唐突だが、アガサこと中野矢尾さんは、藤村由加が産声を挙げたときのお産婆さんではなかったかと思う。お産婆さんが、医者ではないけれども医者に負けない医術を備えていたように、中野さんは、学者ではないけれども、並みの学者が及びもつかぬ科学的な知識と洞察力と、何よりも人格を備えていたと僕は断言できる。そして、中野さんは藤村由加のお産婆さんであったと共に、育ての親でもあったと思う。その役割を彼女に託したのが、祭酒こと榊原陽さんである。『人麻呂の暗号』の巻末に「アガサからの手紙」が載っている。その書き出し。

「万葉集という巨(おお)きな歴史の中を、今日まで手さぐりで旅をしてきましたが、この本はそんなあなた達のささやかな、しかし精一杯の旅行記だといえるでしょう。しかし旅行記を書き終えたことで、あなた達の旅が終わったわけではありません」

そして末尾には、

「あなた達の旅行記に、私の小さな旅を重ねてみました。参考になれば幸いです。若いあなた達を見ていると、いつも故郷は未来にあるのだなあとつくづく思います。近々またお会いしましょう。アガサより」

今読み返すと、この手紙は若い人たちへの遺書でもあったと思う。「若いあなた達」とは、今のトラカレの学生諸君でもあり、それに続くヒッポのこどもたちでもある。

▶福田修冴くん
(新潟市/9歳)

南 繁行
みなみ しげゆき
大阪市立大学大学院教授
電磁気学
言語交流研究所 理事
トラカレ研究協力者

ことばと電磁気学の不思議な結びつき

2005年 ひっぱしんぶん no.19

私は、トラカレの活動に十数年来参加しており、主宰する榊原先生の素晴らしいお考えには、いっぱい感動を受けているひとりです。「物事を内側から見ることも大事である」、「外国の人との交流で、互いに共通性を見いだすことが大事」といったお話には、とても共感をおぼえます。

昔、ソ連当時の学会に招待されて行った時私は、彼の国の人々はとても恐ろしいのだと思っていました。しかし、楽しい時には同じように笑うということを知った時の嬉しさを、今も忘れることができません。そして今では、終生変わらないであろう友情が存在しています。この体験は、私の人付き合いの原点となっています。

さて、私の専門は電磁気学です。宇宙の大部分はプラズマという電気を帯びた粒子でできています。私の研究テーマは宇宙電磁気学といって、オーロラ研究もその中に入ります。最近は電気自動車関連の研究もしていて、この両輪で忙しく走り回っています。私が電気に興味を持ったのは、こどもの頃、家にいろんな電気部品があってそれをさわったり壊したりしていたからだと思います。

こどもの頃は友だちと遊ぶのは大好きでしたが、学校の授業を受けることは嫌いでした。小学校までこどもの足で30分ほどかかりましたので、いやな授業の教科書は持って行かず、取りに帰らせてもらい、うまく、授業に出ないで済むことをやっていました。

中学はなおさら行くのがいやでした。今考えると、勉強は人と差を付けるための競争であって、一体何に役立つのかという反発心があったからだと思います。中学卒業時には「その成績で高校へ行くのか」と言われました。こども心に社会を斜めに見ていたところもあった気がします。幸い、私が入学した高校はとても自由な雰囲気で、私の気性に合っていたのでしょうか、学問も徐々に好きになりました。

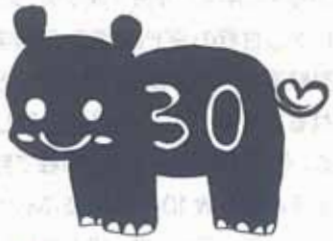
というわけで、学校というところはあまり好きではありませんでした。しかし大学3年からの専門科目は楽しくて、砂漠に降る雨のようでした。私は大学に入っても、まさか教員になるとは思っていませんでしたが、いつの間にか大学就職が決まっていました。そこで私は、授業を受ける学生さんたちの目線で教育したいと考えるようになりました。学生さんが学問をする意義を自覚し、好奇心が湧いてこそ、教育の効果もあるというものです。

今、トラカレでは、電磁気学を体系付けたマックスウェルの式の理解に取り組んでいます。電磁気学では、電気が引きつけ合うとか電流が磁気をつくるといった個別の単元の積み上げからでは、電気の本質的な理解は難しいのです。結局、単語や法則の名前だけは覚えたけれど、電磁気学は何もわからなかったなあ、ということになります。最初は難しくて不安になるけれど、全体を包含したこの式を理解しようとしていますと、いつか突然、電磁気学がはっきりと見渡せるようになります。これはことばを獲得する過程と、とても似ていると思います。

電磁気学では「場」という考え方で、現象を理解します。「場」は見えるものではなく、その中に別の電気や磁気を帯びた粒子が入ってきた時受ける力によって、結果として「場」の存在や強さがわかるのです。ところがその別の粒子もまた自分の「場」を持っているので、それが元々電気や磁気を帯びた粒子がつくっていた「場」を変化させ、その粒子自身にも影響を与えます。この現象を電磁気学では「相互作用」といいます。

これは、人それぞれがつくり出す雰囲気とその作用に、とても似ていると思います。私たちが相手の存在を意識すると、自然とお互いの気持ちは影響を与え合うものです。英語のExchangeの意味はそこにあります。相手の心は、遠くから望遠鏡でのぞいても知ることはできません。お互いの理解に重要な役割を果たしているのが「ことば」です。ヒッポの活動の価値のひとつは、ことばによる心の交流を通して、お互いが新しい発見をし、理解を深め、変わってゆくという「相互作用」の心地よさの体験を楽しむことにあろうかと思います。そして人と人との関係は、お互いの信頼と愛があればうまくいきますし、逆にそれらが存在せずに、単にことばを会話の技術と見なしたのでは、誤解だらけのものになってしまいます。

ヒッポの活動では、愛のある家庭的なきずなが存在していきます。内側に位置して同じ目線で「一緒にがんばろうね」という暖かみ。家族同様の心で交流すればこそ、人と人の間に素晴らしい関係が成り立つのだといえます。このような「場」の存在することが、ヒッポファミリークラブの成功されている理由だと思います。



▲玉ゆきのちゃん（藤沢市／11歳）

山崎 和夫
やまざき かずお

京都大学名誉教授
理論物理学
トラカレ研究協力者

果てしなき問い ～物質とは何か？～

2005年 ひっぽしんぶん no.20

私がヒッポとご縁を持つようになったのは1983年の秋に榊原さんと京都でお目にかかって以来である。それは榊原さんが、私の恩師ハイゼンベルク先生の著書『部分と全体』（みすず書房）の私の翻訳に大変感銘を受けられて、会いたいといわれての出会いであった。そして翌年開講されたトラカレで量子力学の話をすることになった。その頃の20人以上いた1期生は皆とても熱気にあふれていて、一体どのように話をしたらよいのか、試行錯誤を重ねながらの講義であった。数式はなるべく書かない方がよいかと思ったが、かまわないからどんどん書いて下さいということで、黒板にいっぱい数式を書き並べて話した。ヒッポ流に数式もことばの一種として、まず大波的に捉えようということなのだと理解した。それ以来プランク、アインシュタイン、ボーア、ハイゼンベルク、パウリ等の人間の紹介に絡めて、主として量子力学の話を20年以上、ずっと休まずに続けてきた。その間にトラカレ生の生んだ『量子力学の冒険』等々、とにかく素人集団としては驚くばかりの努力と気合いで、この種の書物を次々に生み出していく見事さには感心させられている。去年は主として相対性理論の話をしたが、今年はその特殊相対性理論の誕生100周年ということで「国際物理学年」の催しが各国で行われることになっている。たまたま私は昨夏スイスのベルンにある、100年前頃に新婚時代のアイ

ンシュタインが住んでいた街を訪ね、現在はアインシュタイン・ハウスという記念館になっているところへ行った。ベルンの中心街に近いその辺りは世界遺産に登録されている古い町並みで、100年前とほとんど外見が変わっておらず、アインシュタインがこの風景の中で相対性理論を考えていたのだなと感慨を新たにした。

私の専門は素粒子論である。古来から人類が食べることにのみ、その全エネルギーを注ぎ込まなくてもよくなってから抱き続けてきた根源的な問いかけとは「宇宙とは何か」「物質とは何か」「人間とは何か」「生命とは何か」等であったろう。人間とは何かに関する主な話のひとつがヒッポの主題「ことばとは何か」だと思う。素粒子論とは「物質とは何か」についての現代版だと思われる。2500年ほど昔にギリシアのデモクリトスが物質を細かく細かく分割していくと、それ以上分割できない「原子」(atom…a=not, tom=dividable)にいき着くという哲学的な「原子論」を提唱した。それが近代になって、物質を細かく分割していくとまず分子に、さらにそれを分割すると原子に(不幸にして今日では少し早まってこの名称をつけてしまったが)原子を分割すると原子核と電子に、さらに原子核を分割すると陽子と中性子に…。そして電子、陽子、中性子等を素粒子と名付けてきた。それらに光子、ニュートリノ、陽電子を加え、私が大学に入学した頃は、それに湯川中間子が加わったものが素粒子の全部であった。ところが前世紀の中頃から次々に新しい素粒子が発見されてきた。そのような素粒子が数100種類にも及んでくると、ごく自然に素粒子を分割すると何になるかという問いが生じてきた。そこで巨大加速器で加速した素粒子同士をものすごい勢いで衝突させると、確かにどちらの素粒子も粉々に多くの破片に砕け散った。しかしその破片をよく調べてみると、どれも上記の既知の数100種類の素粒子の中のどれかであった。つまり素粒子(全体)を分割すると素粒子(部分)になるということ。元の素粒子の破片として生じた多数の素粒子の質量は、結局元の素粒子の持っていた莫大な運動エネルギーが、アインシュタインの関係式 $E=mc^2$ によって、質量に転化して生じたものであった。このように素粒子の段階では構成要素である部分と、元の全体との質的な区別がなくなったというのが私の恩師ハイゼンベルク先生の晩年の学説の土台である。

ハイゼンベルク先生とは10年間に多分2、300回は、彼の所長室で物理の話をした。彼の部屋に入って握手をしながら「Guten Morgen Herr Professor(先生おはようございます)」「Guten Morgen Herr Yamazaki, Nun was gibt es Neues?(おはよう山崎さん、それで何か新しいことは?)」ですぐに物理の話が始まる。先生は忙しく又厳しい方で、所長室では天気の話も世間話もしたことがない。しかし彼は対話の相手の話を本気でよく聞いてくれて、その中からプラスになる何かを発見しようと、常にプラス志向の人であった。話の内容はもっぱら素粒子の統一場理論に関する詳細な数式の解法と、その物理的解釈に関するものだった。

しかし世界の99%の素粒子論学者は素粒子を分割すると、クォークと呼ばれる粒子からできていると信じている。それでもクォークを単独で発見しようとする数10年にも及ぶ努力が成されたにも関わらず、誰も成功しなかった。そこでクォーク間には特殊な力が働き、クォークは素粒子の中に閉じ込められて、単独では発見することが原理的に不可能であるという理論がつくられ、それが今日の標準理論と呼ばれる理論の土台になっている。ハイゼンベルク先生は「クォークは存在しない」と主張し続けて亡くなった。彼に言わせれば素粒子を分割すれば素粒子から成り立っているという段階で"分割する"ということばが意味を失い、クォーク仮説は誤ったデモクリトス流の原子論に基づく哲学的な問題の建て方によっていて、クォークが原理的に単独で発見できないのなら、それは理論をつくるのに便利な数学的な道具であっても、それを実在する粒子とは言わないのだと主張する。彼には、アメリカ流の哲学不在で、実用主義的な物理学が我慢できなかったのである。

▲西塔葵ちゃん(浦安市/11歳)

▲小林江美さん(八王子市)

felicitations

丸山 瑛一
まるやま えいいち
理研イノベーション推進センター
特別顧問
言語交流研究所 理事
トラカレ研究協力者

発見は足もとに

2005年 ひっぽしんぶん no.22

私とヒッポの出会いは、今から20年ほど前、国鉄（現JR）に居られた尾関雅則さんが日立製作所の常務取締役として着任されていた頃のことです。当時、私は日立の中央研究所にいて、同僚からこんな活動があるよ、と紹介されたのがきっかけでした。"ヒッポのマテリアル"として彼に聞かせてもらった英語と韓国語で交互に語られているテープには、大変面白そうだと興味をもちました。そこで、私もぜひ欲しいと思ったのですが、メンバーになることが条件とのことで、毎週の参加は時間的に無理だろうと一度は諦めましたが、ヒッポにはトラカレという研究部門があると聞き、活動自体に大いに興味をそそられ本部にお邪魔するようになりました。

そこでは、榊原さんの自然習得の理論に感心したり、メンバーの方々が自由に多言語をあやつる姿に驚嘆したり、フェロウの方たちから楽しい体験談を聞かせてもらったりしました。ところが、多言語の自然習得のことをいろいろ人に話してみても、なかなか信用してもらえないのです。知り合いの著名な女性物理学者には「それが本当だというなら、丸山さん、ここで7ヵ国語を喋ってみせてよ。そしたら信用するわ」と言われました。そこまで言われてはやってみせるしかない、と思いヒッポに参加したのです。

私は学生時代には科学史や物理の研究に携わり、社会に出てからも企業研究者として様々な研究開発の分野で仕事をしてきました。特に30代から40代にかけての10年間は、NHKとの共同研究の日立側のリーダーとして、新しい"テレビ撮像管"の開発とその実用化に向けて取り組んできました。とにかくまだ誰もやったことのないものをつくるわけですから、その頃は、研究所から近くの自宅に帰るのもこどもと風呂に入る時位で、風呂をすませてはまた研究所へというような生活でした。どうにか5年ほどで画像が満足に映るところまでこぎつけましたが、今度は、また新たな問題点が次々見つかってくるのですからたまりません。"焼き付き"と呼ばれる画像の欠陥をクリアにするには、画面のキズをなくすためには、耐熱性を高めるには、画像を高感度化するには、という壁をひとつひとつ越えていくための"実験"は、それこそ失敗と挫折の連続。それでもそこから手にした"発見"を、皆で積み重ねていくことでしか真の完成に近づくことはできません。

"発見"は足もとの金塊のようなものです。通常はそれが金塊であることに誰も気付きません。それを見つけるためには自分の中でいつも探し続けていることが絶対に必要です。考えられる限りのあらゆる実験を重ね、あらゆる可能性を探り、自分で思いつく限りのことをやりつくし、もうやることがなくなったと思う頃に、突然、発見は向こうから顔を出してくれます。そんな経験をこの開発の中で何度もしました。

この時の撮像管の開発は、全国発明表彰で科学技術庁長官賞を受賞しました。その後、共同研究者の谷岡さんの大発見で恩賜発明賞を受賞するというブレークスルーを経て今では、世界一高感度の撮像デバイスに進化しています。

人間がいかにして言語を習得するかというメカニズムは、これまでほとんど解明されてきていません。人間は誰でも言語場の中に投じられると何ヵ国語でも自然に習得できるという事実や体験をもとに、科学的な言語学習理論を新たに構築しよう、というチャレンジングな実験の場が、ヒッポでやっていることの本質ではないでしょうか。ひとりひとりの実体験からの"発見"を構築していく場だといってもいいでしょう。

かつて「エスペラント」という人工言語が世界的に流行しました。しかし、人工的につくられたことばはどんなことばでも、やがては死んでしまいます。ことばを人間の「生きて成長している現象」として捉え、そこに向けて様々な挑戦をしているヒッポの活動は、まさに新しい試みでありサイエンスの実験と重なるものです。

現在、私は理研スタッフを対象にしたヒッポの活動を主催しながら、研究者たちの知的好奇心を刺激するアプローチはないものかと、まだまだ悪戦苦闘中です。研究者たちは多言語に興味をもちながらも、幼児の習得プロセスを模倣するヒッポの活動には、なかなか参加しにくいようです。ですが、先の研究体験のたとえでいうと、彼らのニーズに応えられるような活動のやり方について、考えられることはいろいろ試みて、なんとなく解決が近い、という予感が得られてきました。理研のヒッポはかなり要求の高い人たちの集まりですから、彼らの多言語体験を話し合う場がひろがれば、ヒッポ活動が今後、より明確に理論付けられ、活動にももっと奥行きや幅が生まれてくるのではないかと思っています。

（インタビュー）

Message

2010年 ヒッポのこどもたちへ

4~50年まえにHippyといわれる若者たちがたくさんいました。Hippoはもっとりっぱな人たちです。私は不思議な縁で榊原先生をはじめ、トラカレのみなさんと親しくなりました。私は"Hippophile"と言ってよいでしょう。(馬が好きだという意味ではありません。ヒッポを愛する人)もう長く東京にでていませんが、いつか新しいヒッポの諸君にも会える機会があることを願っています。

Hippo, hippo, hurrah!　　南部 陽一郎

我々大人は、ことばを覚える時に、どうしても勉強という姿勢が抜けません。しかし、ことばは、人と人を繋ぐもの、人と人との間で意味を運び、伝え合うものです。ヒッポでは、そんなことばを楽しんでください。　　尾関 雅則

ヒッポは「ことばは教えられるものではなく、内側から見つけるものである」という基本的な考えから、ことばはもとより、広い意味でそれに関連した分野で「自分で見つける場」をつくってきたのかなと思う。この場で育った人たちには、知的好奇心が旺盛で、誰に対してもオープンマインドで、自分を素直に表現できる人が多い。将来、この人たちが、世界中で大いに活躍することを期待する。　　内田 幹和

長年、大学で教えていて気付くことは、女子が元気で、はらはらするような海外一人旅をしているのに対し、男子が臆病になり、外国へ行こうともしない者が増えたことです。ヒッポの人たちは、そうでないことを信じますが、若いうちは、貪欲に何でも吸収して欲しい。

日本の方が上だなどと考えずに、謙虚に、その土地の文化を受容すること。何よりも、好奇心を抱き続けることです。

永井 清陽

小学校四年生で担任の先生が替わった。先生はまず黒板に大きな文字で「姿勢」と書き、「背筋をまっすぐに」と言った。それから最初の授業が始まった。この「背筋をまっすぐに」ということばは、十代をとおしていちばん心に残ることばになった。平凡だが、これは身体だけでなく精神のありようにまで及ぶものだ。諸君、背筋をまっすぐに。　　赤瀬川 隼

色々な機会に、今の日本の若者は一般に外国に興味がない、あるいは国外に行きたがらない、というような話をよく耳にします。例えば、私の昔勤めていた大学で、経済的やその他色々好条件で留学生を募集しても、応募者が少ないとか、単なる外国への観光旅行ツアーでも若い人の割合が減っているということです。半世紀以上昔の私どもが若かった頃には、およそ考えられなかった話です。外の世界で何かの夢にチャレンジしたいと思えるのが、若者の特権でした。年を取れば色々な職業上の義務やその他諸々のしがらみが生じてくるでしょうから、若い間に大いに見聞を広めるべきだと私は思います。ヒッポの皆さんは旺盛な外国への興味を常に持ち続けて下さい。

山崎 和夫

ここ4年ほど私の職場である理研でヒッポ活動を試みています。理研の人たちは英語の日常会話には不自由しない人が多いので、外国語に対する要求が高く、通常のヒッポプログラムでは満足しません。試行錯誤を重ねて辿り着いたのが、「赤ちゃんからこどもへ」の道です。赤ちゃんはこどもになるとやがて幼稚園にゆき、学校に上がって文字や文章を勉強します。そこで私なりにヒッポ方式を工夫して、ヒッポのCDと「音のフレーズブック」を繰り返し聴いています。この方法で何語でもどんな高度な内容の文章にもチャレンジできます。いつかヒッポの皆さんに紹介できればいいなと思っています。　　丸山 瑛一

HIPPO FAMILY CLUB のご案内

ヒッポファミリークラブでは、7ヵ国語の物語や歌のCDを中心に、地域で多言語（現在は21ヵ国語）の活動をしている民間の団体です。世界各国とのホームステイ交流などのさまざまな活動を通じて、世界中に家族同様の友だちをたくさんつくっています。アメリカ、メキシコ、韓国、台湾にも支部があります。

詳しくはホームページをごらんください。

出版物：暗号シリーズ「人麻呂の暗号」他（新潮社）冒険シリーズ「フーリエの冒険」他（ヒッポファミリークラブ）冒険シリーズには英語・韓国語・中国語・スペイン語版もあります。

編集後記　今年30周年を迎えたヒッポファミリークラブ。おかげさまで「ひっぽしんぶん」も創刊10周年となりました。この10年を振り返り「ひっぽしんぶん特別復刻版」を記念号としてお届けします。研究協力者や活動協力者の方々からの寄稿の中に、改めて「ヒッポとは何か？」の原点をみつける思いがします。メンバーの皆さんにも、ヒッポの真ん中を感じてもらえたら嬉しいです。次号は、記念特別号の後編です。お楽しみに！（編集部：佐藤、高野、千代田）

デザイン：小山潔子

ひっぽしんぶん 49号　2010年12月1日発行